

内閣府 平成 23 年度 地域における男女共同参画連携支援事業

災害時における シニア女性の行動と意識に関する調査 報告書

横浜市南区で「2011 年 3 月 11 日」を経験した
65 歳以上の女性、約 900 人に聞く

2012 年 3 月

公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会

目 次

はじめに	3
I 災害時におけるシニア女性の行動と意識に関する調査	
1 調査の概要	
(1)背景と目的	7
(2)実施概要	7
2 アンケート調査の結果	
(1)回答者像	8
(2)3月11日の震災時の状況について	12
①震災時どこにいたか	
②帰宅できたか	
③震災時の行動	
④地震による被害	
⑤揺れが収まってからの行動	
⑥どの電話から連絡したか	
⑦揺れた直後の情報入手	
⑧震災時に一番頼りになる人	
⑨震災時だれかに助けられたか	
(3)その後について	17
①震災後1ヶ月間の情報入手	
②震災後1ヶ月間に困ったこと	
③大震災がきたら不安なこと	
④被災地支援	
⑤災害への備え	
⑥震災発生時にできそうなこと	
(4)自由回答のまとめ	22
3 グループ・インタビュー「災害とシニア女性のチカラ」	25
II 「シニア女性の防災力を生かした地域づくり連携事業」検討会	
検討委員名簿	33
1 第1回	34
2 第2回	38

Ⅲ まとめ

～シニア女性の防災力を生かした地域づくりに向けて

1	シニア女性の潜在力とは・・・・・・・・・・・・・・・・	47
2	3.11 そのときシニア女性たちは・・・・・・・・	48
3	地域におけるシニア女性のリーダーシップの課題・・・・・・・・	49
4	シニア女性の潜在力を生かすには・・・・・・・・	50
5	おわりに・・・・・・・・	51

Ⅳ 資料

1	アンケート調査票・・・・・・・・	55
2	新聞記事・・・・・・・・	59
3	横浜市男女共同参画推進協会 2011 年度東日本大震災関連事業一覧・・	62

はじめに

2011年3月11日の東日本大震災を受けて、横浜市の男女共同参画センター3館を管理運営する公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会では、横浜市市民局男女共同参画推進課とともに、「災害・防災と女性」調査研究検討会を立ち上げた。東日本大震災はこれまでの私たちの暮らしのありよう、地域のありようを根底から揺るがす経験であったが、阪神・淡路大震災以後も、行政による男女共同参画の視点が反映された調査はあまり行われてこなかった。そこで、男女共同参画センターとしていま地域社会に貢献する事業は何かを検討し、実行に移していくために、私たちはまず調査研究事業に取り組むことにした。

具体的には、「災害時における男女共同参画センターの役割調査」（協会本部事業企画課担当）、「災害時における女性相談窓口設置に関するマニュアルの作成」（男女共同参画センター横浜担当）、「災害時におけるシニア女性の行動と意識に関する調査」（男女共同参画センター横浜南担当）「改訂版『わたしの防災力ノート』（ワークシートつき）の作成」（男女共同参画センター横浜北担当）の4事業である。※当協会の「2011年度東日本大震災関連事業一覧」を、IV資料の末尾に掲載。

本報告書は、このうちの「災害時におけるシニア女性の行動と意識に関する調査」の結果を報告するものである。なお、この調査は「内閣府 平成23年度 地域における男女共同参画連携支援事業」として採択された事業の一部であり、同事業で実施した2回の検討会についてもあわせて報告する。

「災害時におけるシニア女性の行動と意識に関する調査」を男女共同参画センター横浜南(フォーラム南太田)が行った背景には、当センターが立地する横浜市南区は65歳以上の老年人口割合が22.7パーセントと市内でも3番目に高く、1人暮らしの高齢者もたいへん多いという事情がある。南区の人口密度は市内で一番高く、昔ながらの人情の残るいわゆる下町であるともいわれる。そうした地域にあって、誰もが安心して暮らせる地域づくりの担い手として、シニア女性に焦点をあてることにした。

実際には、東日本大震災を経験した南区在住の65歳以上の女性たちの行動と意識について、郵送によるアンケート調査を行った。災害弱者としてだけではない、地域づくりの担い手としてのシニア女性の存在に光をあてたいと私たちは考えた。女性のもつ潜在力が地域で発揮できるよう、シニア世代の地域活動の中で男女共同参画をすすめるにはどうしたらよいか、その手がかりとしてこの調査報告書をまとめた。

さらに、調査結果をふまえて、地域の関連各機関の方たちとの連携強化をめざして検討会を行った。10月のトーク&ライブ「災害と女性のチカラ」のなかでまず調査の中間報告を行い、さらにメディアを通じても広く発信することができた。これら一連の取組の結果、得られた地域の関連各機関のネットワークおよび検討結果を活用して、次年度以降、地域づくりに役立つ男女共同参画センターの新たな事業の開発、実施につなげようとしているところである。

なお、「内閣府 平成 23 年度 地域における男女共同参画連携支援事業」として、男女共同参画センター横浜南で年間を通して行った一連の取組は次のとおりである。

(1) 「災害時におけるシニア女性の行動と意識に関する調査」の実施

- ・横浜市南区老人クラブ連合会の協力を得て、区内在住の 65 歳以上の女性約 1410 人にアンケート調査票配布
- ・郵送により 892 通回収
- ・グループインタビュー(11 名) 2011 年 10 月 3 日

(2) 検討会の実施 (委員 12 名)

- 第 1 回 2011 年 10 月 7 日 調査結果報告、各委員の活動紹介、情報交換
- 第 2 回 2011 年 11 月 22 日 事業開発と今後の連携について、意見交換

(3) トーク&ライブ「災害と女性のチカラ」の開催

2011 年 10 月 16 日(日)

- ・「フォーラム南太田まつり」にて開催したトーク&ライブ「災害と女性チカラ」のなかで調査の中間報告およびパネルトークを行う。
- ・講演者は山崎洋子（作家・南区在住）、秦好子（横浜災害ボランティアバスの会代表理事）、清水福子（特定非営利活動法人あかねグループ理事）、岩船弘美（男女共同参画センター横浜南館長）

(4) 事業開発の検討

(5) 調査報告書の作成

本調査の設計から実施に至るまで、財団法人横浜市老人クラブ連合会および南区老人クラブ連合会には厚いご協力をいただいた。また、地域の信頼性の高いメディアである神奈川新聞、タウンニュースには複数回、記事を掲載していただいた。検討会においてさまざまな分野からの知恵や経験をご教示くださった委員の皆様、そのほか、お世話になった皆々様に、この場を借りて心から御礼申し上げたい。

本報告書が、市民の皆様をはじめ、防災や安心・安全な地域づくりをめざす幅広い機関で活用され、シニア女性の力を生かした取組の促進、男女共同参画の視点を取り入れた災害・防災への取組の一助となれば幸いである。

2012年3月

公益財団法人 横浜市男女共同参画推進協会

I 災害時におけるシニア女性の 行動と意識に関する調査

1 調査の概要

(1) 背景と目的

本調査は横浜市内でも高齢化率の高い横浜市南区の地域特性(※)を背景に、南区内に住む「比較的自立度の高い」65歳以上の女性たちの災害時における行動と意識を調査することを目的として行った。

※横浜市南区の65歳以上の老年人口割合は22.6%で横浜市内3位(横浜市全体は19.6%)、75歳以上人口割合は12.2%で市内1位(平成22年度統計)となっている。

(2) 実施概要

対象者：横浜市南区老人クラブ連合会の、65歳以上の女性会員

調査方法：

- ・南区内にある141の「単位クラブ」会長に10通ずつの調査票を郵送し、会長から対象に該当する会員に直接手渡してアンケート票を配布
- ・回答者からの自主的な郵送(料金受取人払い)による回収
- ・配布数 1,410通
- ・回収回答数 892通(回収率63%)
- ・調査期間 2011年8月2日～9月15日

調査項目：Ⅳ資料にある調査票(p.55)のとおり

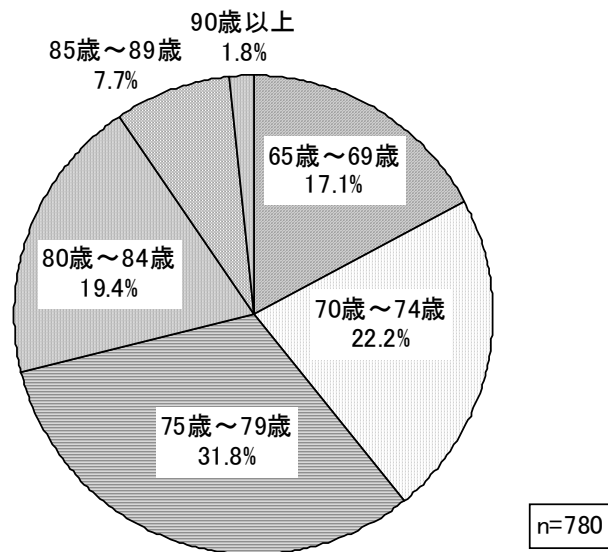
2 アンケート調査の結果

(1) 回答者像

①年齢

回答者の年齢は「75歳～79歳」が31.8%で最も多い。次いで多いのが「70～74歳」の22.2%であり、回答者の過半数が70歳代となっている（図1）。

図1：回答者の年齢（2011年7月1日現在） ※ひとつだけの回答

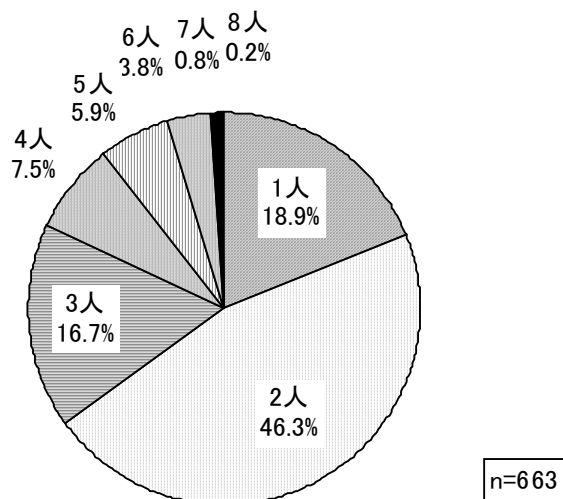


nは回答者数

②世帯人数

世帯人数は、「2人」が46.3%で最も多い。これに次いで「1人」が18.9%となっており、約2割近くが1人暮らしである（図2）。

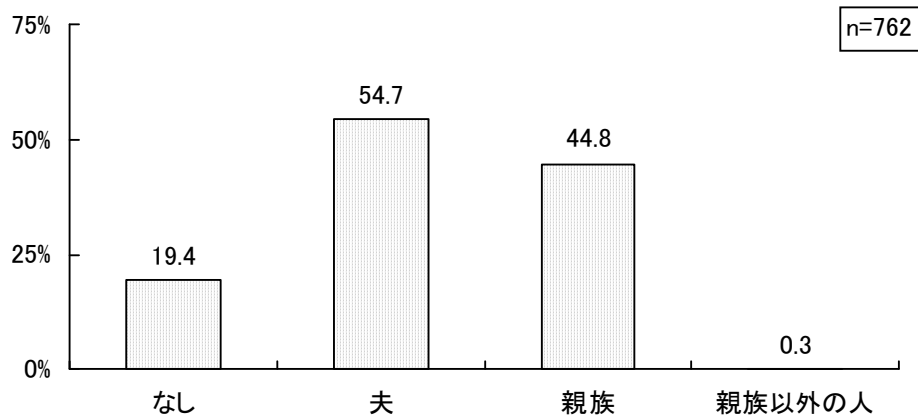
図2：世帯人数 ※ひとつだけの回答



③同居している人

同居している人は「夫」が54.7%で最も多い。「親族」は44.8%である（図3）。

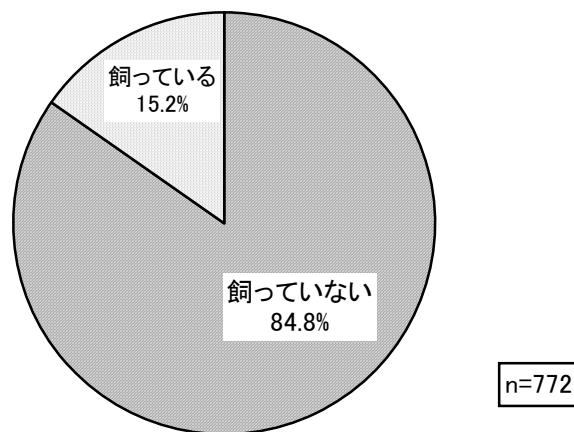
図3：同居している人 ※複数の回答



④ペットを飼っているか

ペットを飼っているのは15.2%である。具体的には「犬」が52件、「猫」が38件、その他「金魚」「セキセイインコ」「カメ」「うさぎ」等の記述があった（図4）。

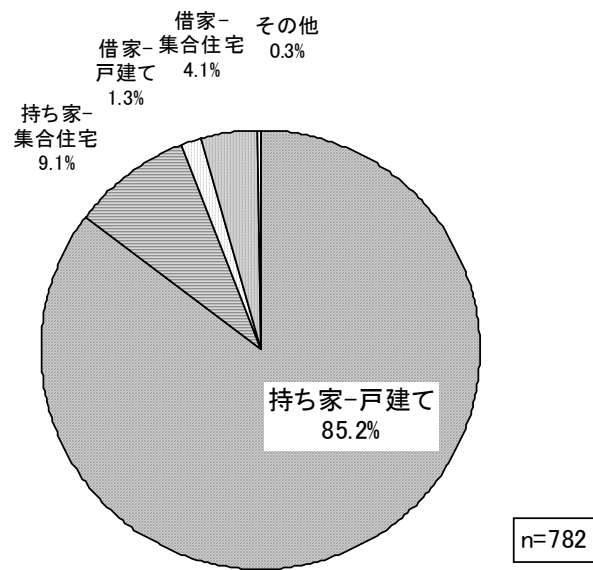
図4：家でペットを飼っているか ※ひとつだけの回答



⑤住宅の状況

住んでいる住宅については「持家かつ一戸建て」が85.2%となっている。次いで「持家かつ集合住宅」が9.1%となっており、持家の割合が9割を超えている（図5）。

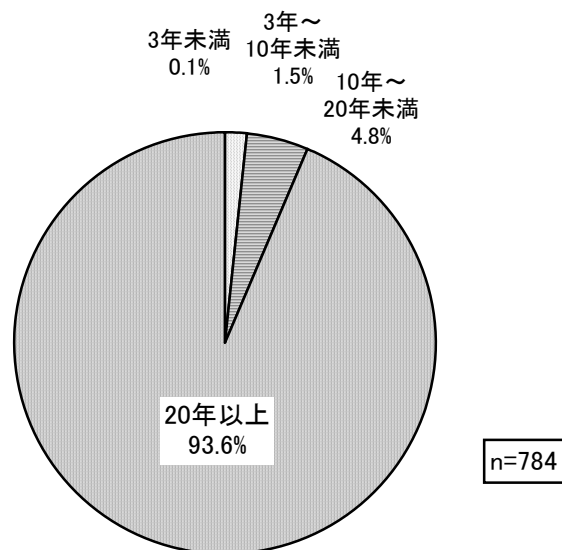
図 5：お住まいの住宅 ※ひとつだけの回答



◎居住年数

横浜市南区に住んでいる期間については「20年以上」が93.6%と多い。これに「10年～20年未満」の4.8%を加えると、98.4%が10年以上の居住者である（図6）。

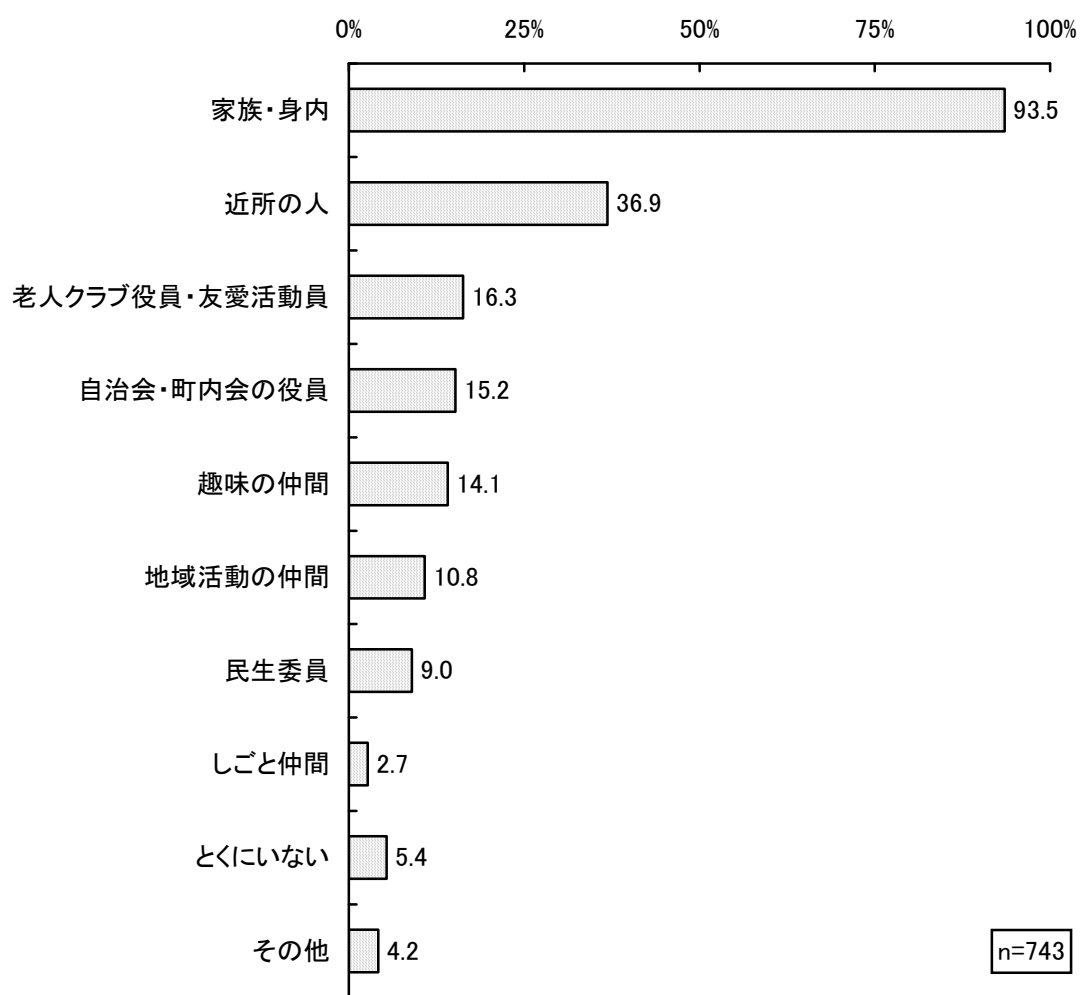
図 6：横浜市南区に住んで何年か ※ひとつだけの回答



⑦困った時の相談相手

日ごろ困った時に相談する人は「家族・身内」が93.5%で最も多い。次いで「近所の人」が36.9%であるが、「家族・身内」の半分以下となっている。なお、「とくにいない」は5.4%のみで、相談する相手がいないのは少数である。「その他」には「友人」「ケアマネジャー」「同じ信仰の人たち」等の記述があった（図7）。

図7：日ごろ困った時に相談する人 ※複数の回答

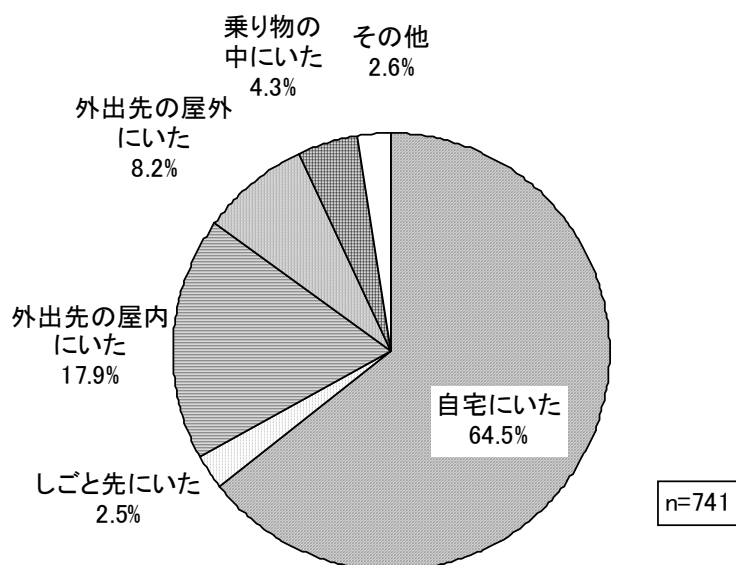


(2) 3月11日の震災時の状況について

①震災時どこにいたか

3月11日の震災時どこにいたかについては「自宅にいた」が64.5%で最も多く、過半数となっている。次いで「外出先の屋内にいた」が17.9%となっており、8割以上が屋内で震災にあっている。「その他」としては「旅行中」「スイミング中」「通院中」等の記述があった。(図8)。

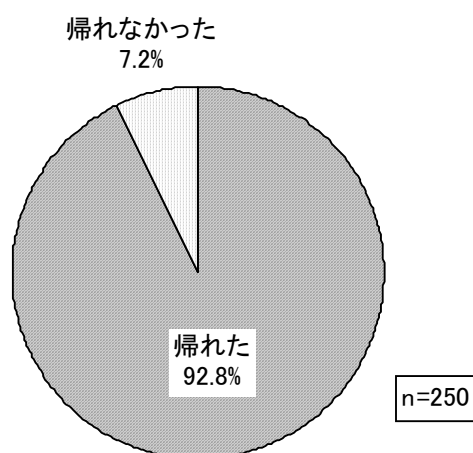
図8：震災時どこにいたか ※ひとつだけの回答



②帰宅できたか

震災時に外出していた回答者がその日のうちに帰宅できたかについては92.8%が「帰れた」と回答している(図9)。

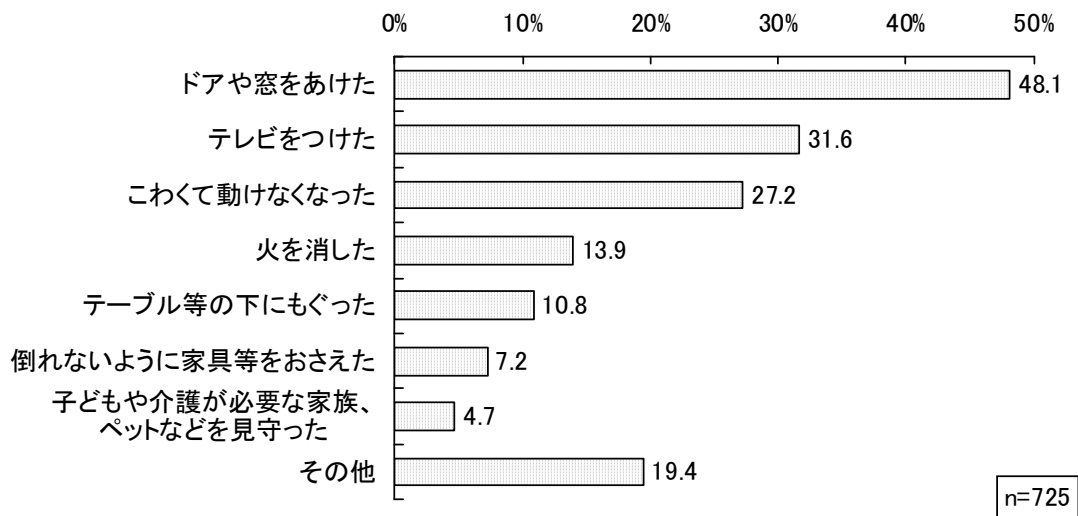
図9：その日のうちに帰宅できたか(出かけていた人のみ) ※ひとつだけの回答



③震災時の行動

震災時、ぐらっと揺れた際の行動では「ドアや窓をあけた」が48.1%と半数近くになっている。次に「テレビをつけた」が31.6%である。「こわくて動けなかった」も27.2%と3割近くになっている。「その他」には、「ペットを抱いて柱にしがみついた」「ラジオをつけた」「広い公園に行った」「病院内で患者同士声をかけ合った」等の記述があった(図10)。

図10：ぐらっと揺れた際に行った行動 ※複数の回答

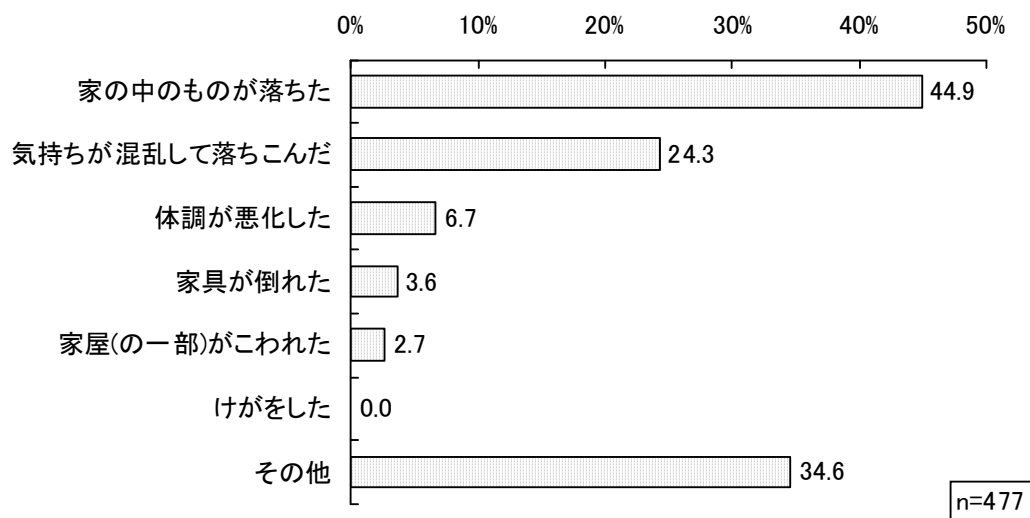


④地震による被害

地震による被害では「家の中のものが落ちた」が44.9%で最も多い。「家屋(の一部)がこわれた」は2.7%、「けがをした」との回答は見られず、比較的軽微な被害が多かったことがわかる(図11)。

なお「その他」の割合が多く、その中には「被害なし」の回答が101件あった。

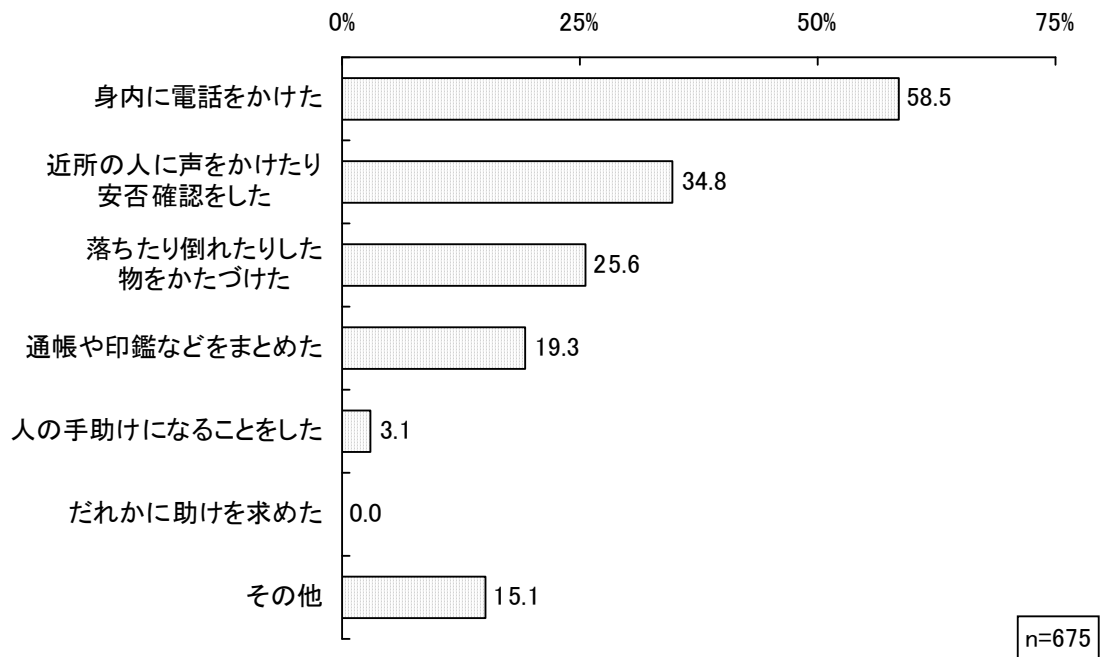
図11：地震による被害 ※複数の回答



⑤揺れが収まってからの行動

揺れが収まってからの行動では「身内に電話をかけた」が58.5%で最も多い。次いで「近所の人に声をかけたり安否確認をした」人が34.8%に上った。「その他」には「トイレ・水道とガスの確認」「飲み水を用意」という記述もあった。(図12)。

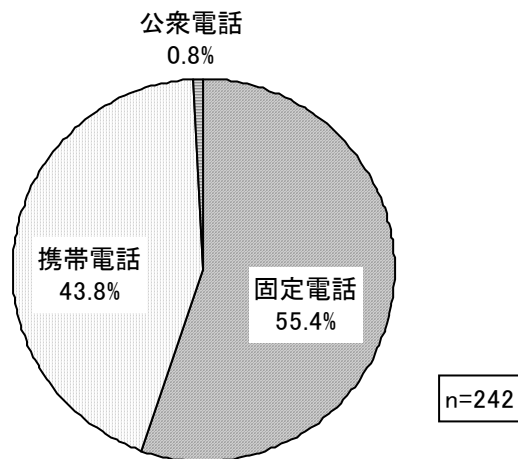
図12：揺れがおさまってから取った行動 ※複数の回答



⑥どの電話から連絡したか

電話連絡した際の手段では「固定電話」が55.4%で「携帯電話」の43.8%を上回った。「公衆電話」から電話したとの回答も0.8%みられた(図13)。

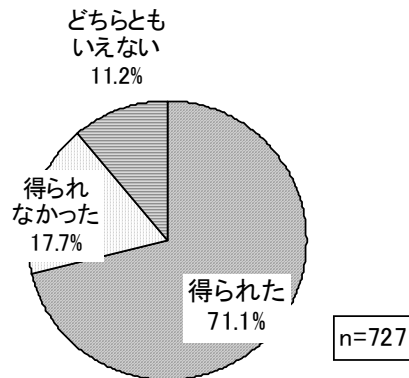
図13：どの電話から連絡したか ※ひとつだけの回答



⑦揺れた直後の情報入手

揺れた直後、確かな情報が得られたかについては71.1%が「得られた」と回答している。そのうち「テレビ」が391件、「ラジオ」が83件である。しかし、「得られなかった」と「どちらともいえない」を合計した28.9%、約3割近くは確かな情報を得られなかったことがわかる（図14）。

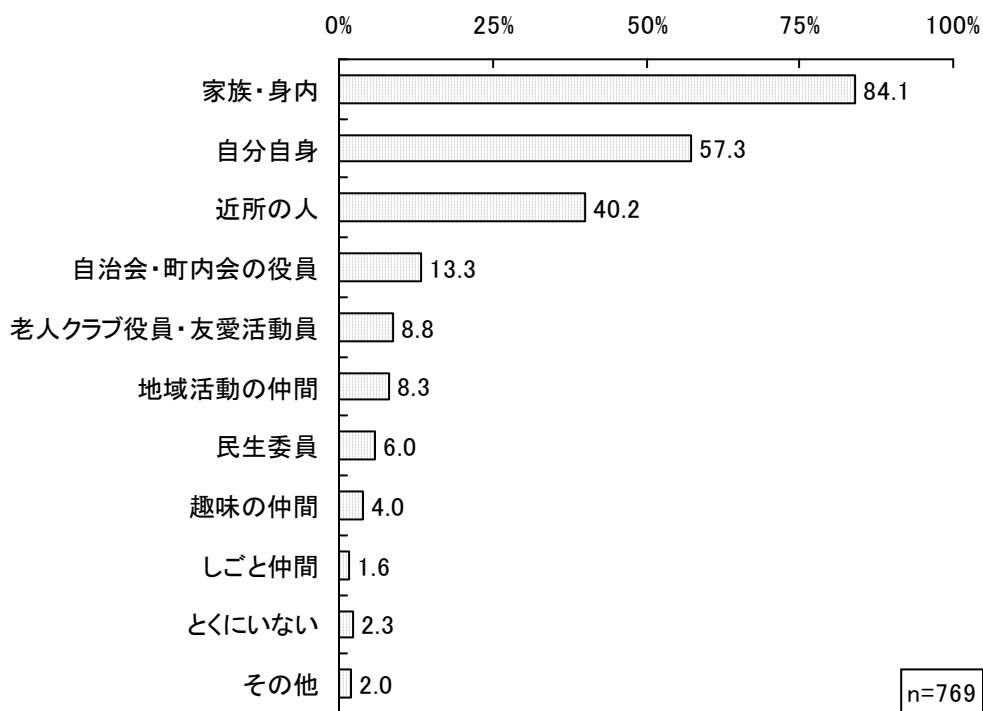
図14：揺れた直後、確かな情報は得られたか ※ひとつだけの回答



⑧震災時に一番頼りになる人

震災時一番頼りになる人は、「家族・身内」が84.1%で最も多く、次いで「自分自身」が57.3%となっており、この2項目のみが過半数となっている。3番目は「近所の人」の40.2%である（図15）。

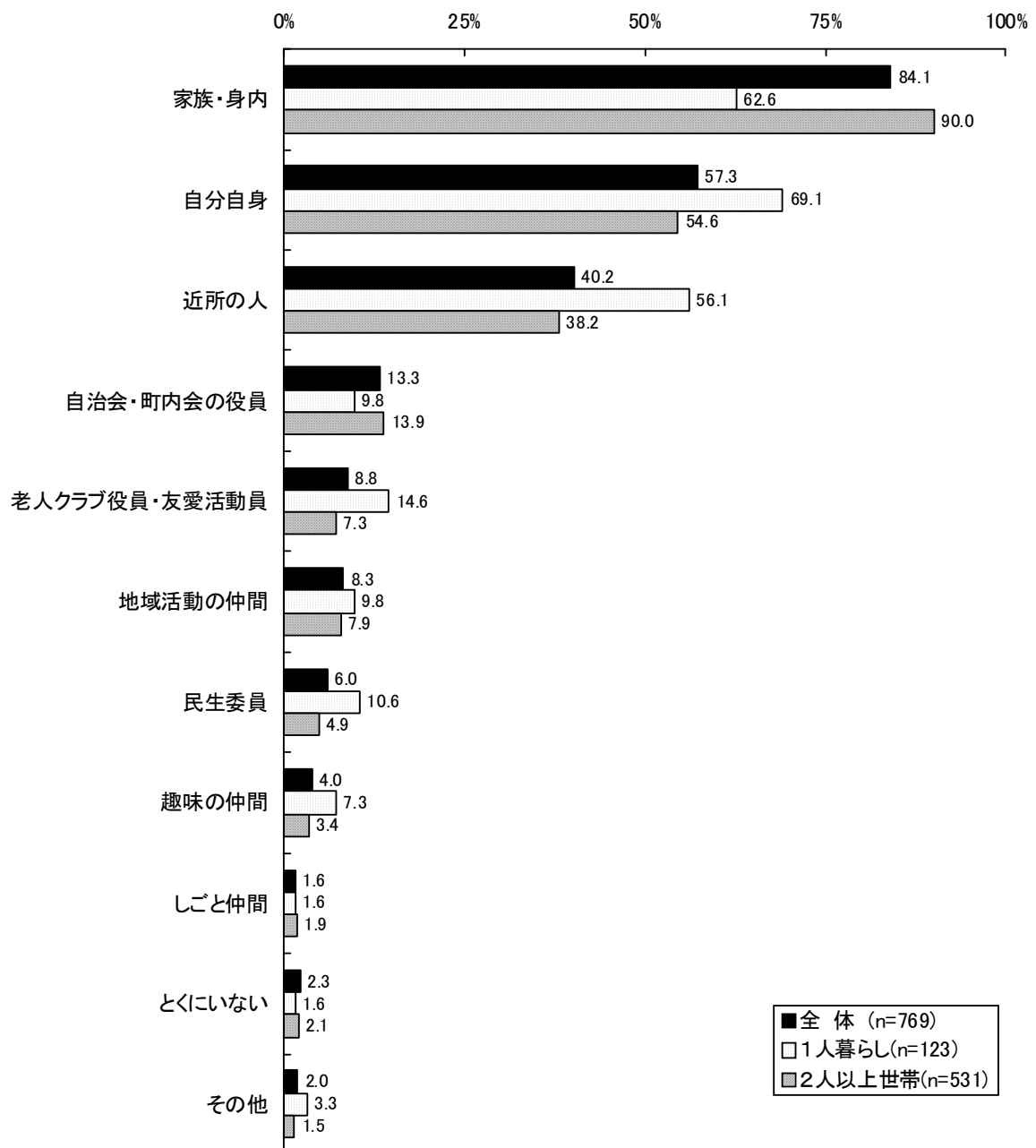
図15：震災時に一番頼りになる人 ※複数の回答



これを同居の家族の有無でみると「1人暮らし」では「自分自身」(69.1%)、「身内・家族」(62.6%)、「近所の人」(56.1%)の順となっている。「近所の人」は3番目となっているが、その割合は半数を超えており、全体の値よりも高くなっている。また「老人クラブ役員・友愛活動員」、「民生委員」も1割を超える。その一方で「自治会・町内会の役員」はやや少ない。

「2人以上世帯」では「身内・家族」が90.0%と多い。これに「自分自身」(54.6%)、「近所の人」(38.2%)が続いている。「その他」には「同じ信仰の人」「ボランティア仲間」「昔からの友人」等の記述があった。(図16)。

図 16：震災時に一番頼りになる人（家族の有無による区別） ※複数の回答

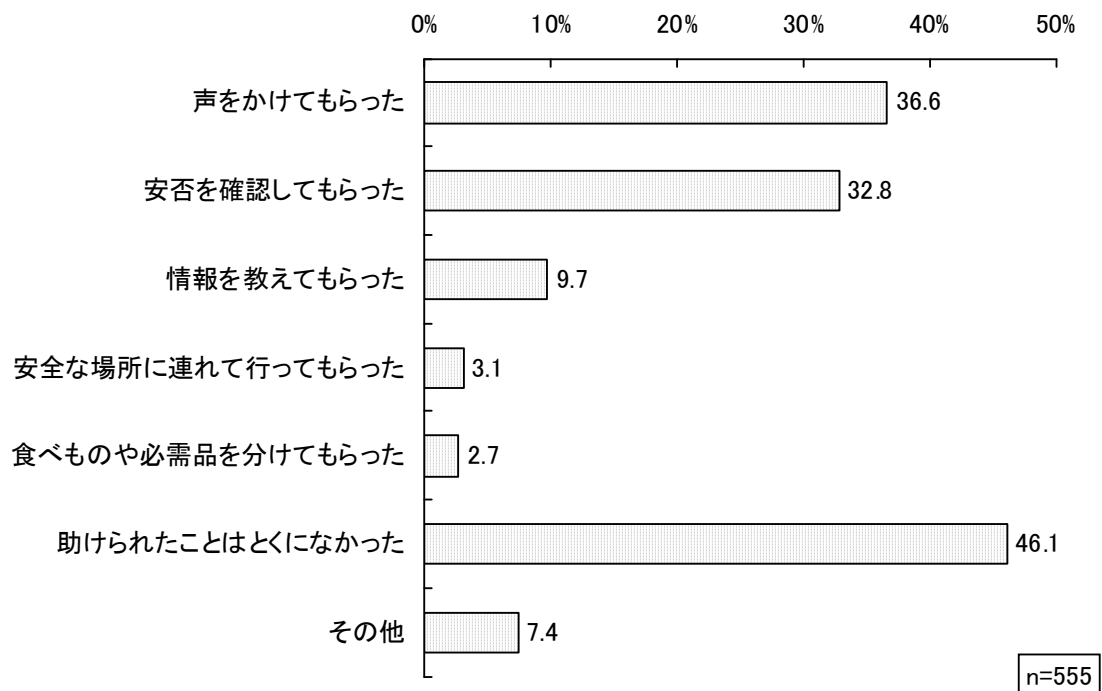


◎震災時だれかに助けられたか

震災時、だれかに助けられたかについては「助けられたことはとくになかった」が46.1%で最も多い。これに「声をかけてもらった」の36.6%、「安否を確認してもらった」の32.8%が続く。

その際、だれに助けられたかが「その他」の記述にみられる。「民生委員」「町内の人」「老人クラブの人」「(集合住宅の) 同じ階段の人」など。「(道を) 歩いている人」「居合わせた客・店員」という記述もあった。(図17)。

図17：震災時だれかに助けられたか ※複数の回答



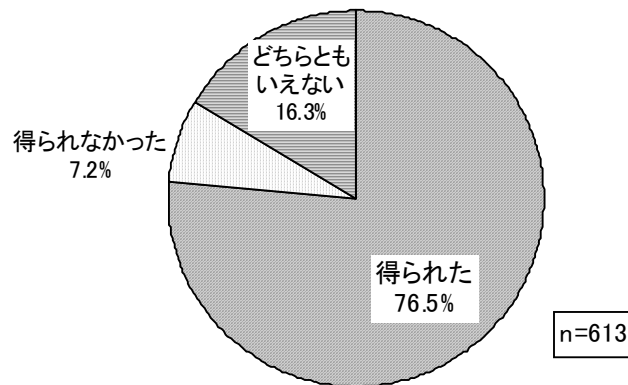
(3) その後について

①震災後1ヶ月間の情報入手

震災後、1ヶ月間に、生活に影響する情報を得られたかについては76.5%が「得られた」と回答している。情報が得られた割合は震災直後より5ポイント程度増えている。

自由記述からわかる情報が得られた先として「テレビ」が369件で最も多い。また「新聞」が108件、「ラジオ」が66件であった。震災直後と比較すると、「新聞」が多くなっている。その他、少数だが「インターネット」という回答もあった。(図18)。

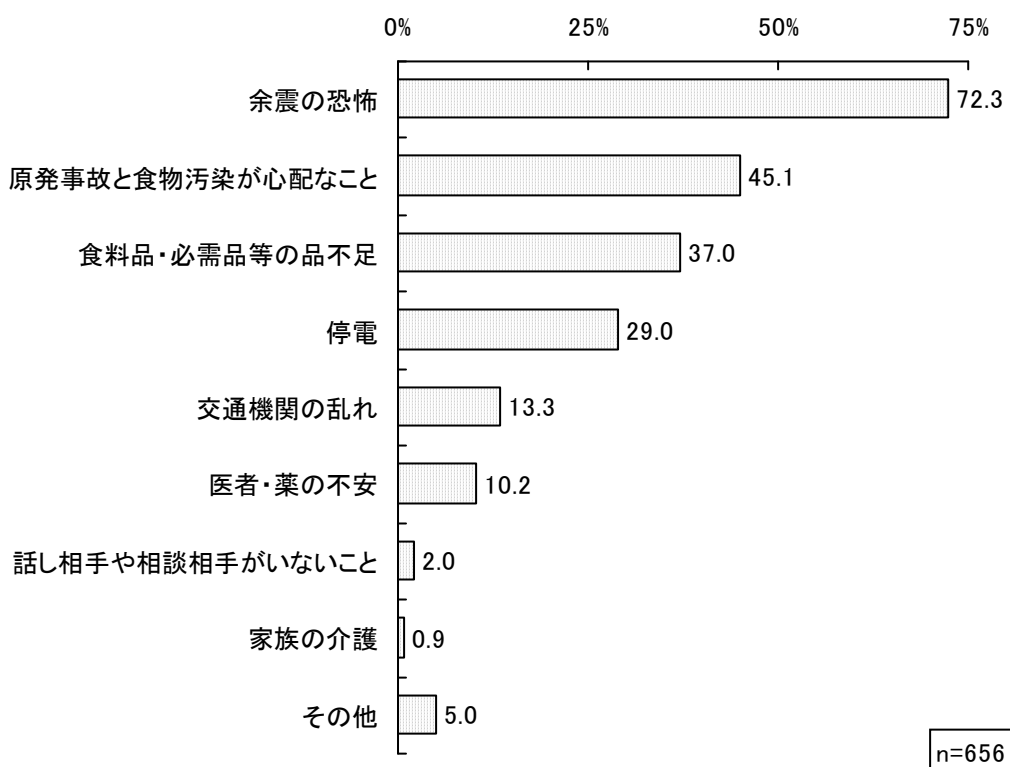
図 18：震災後1ヶ月間に、生活に影響する情報を得られたか ※ひとつだけの回答



②震災後1ヶ月間に困ったこと

震災後、1ヶ月間に困ったことについては「余震の恐怖」が72.3%で最も多く、唯一過半数となっている。次いで「原発事故と食物汚染が心配なこと」の45.1%が続く。「その他」には「停電で水が出ないトイレ」「家が古いので倒壊する危険」「屋根の瓦が落ちたので雨降りの心配」「計画停電の情報の混乱」等の記述があった(図19)。

図 19：震災後1ヶ月間に困ったこと ※複数の回答

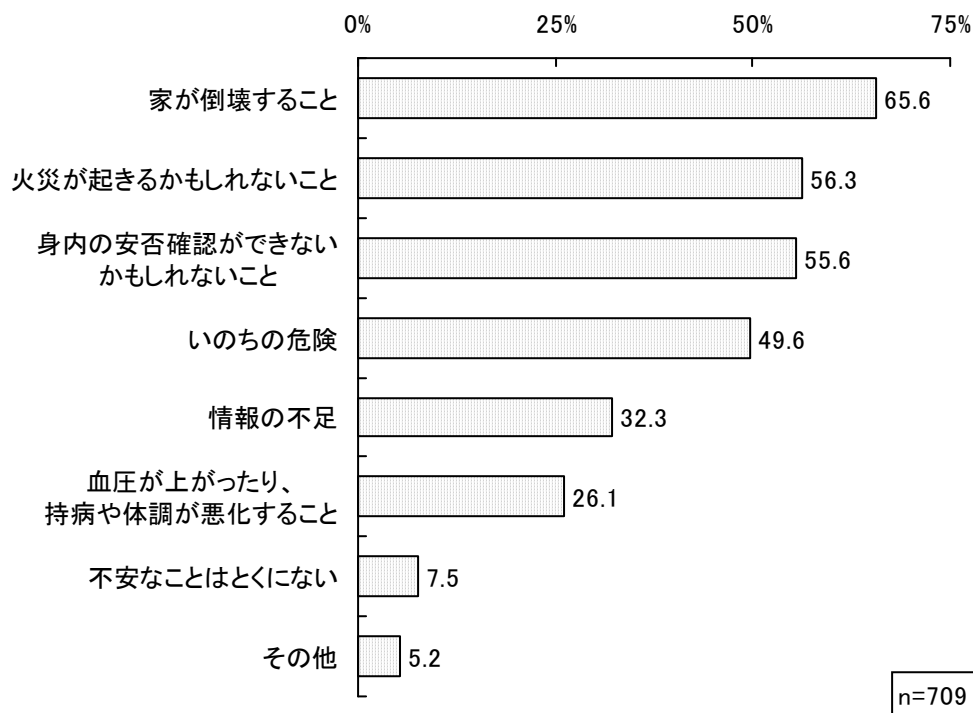


③大震災がきたら不安なこと

今後、大震災がきたら、不安に感じることは「家が倒壊すること」(65.6%)が最も多く、次いで「火災が起きるかもしれないこと」(56.3%)、「身内の安否が確認できないかもしれないこと」(55.6%)となっており、この3項目が過半数となっている。また「いのちの危険」も49.6%でほぼ半数となっている(図20)。

「その他」として「難聴なので情報がわからない」「夫が障がい者なので避難できない」「ペットの避難先」「自分の気持ちが動転してしまう」「大津波の不安」「避難場所(の規模)に対して住民が多い」「透析中だが病院があるか」等の記述があった。

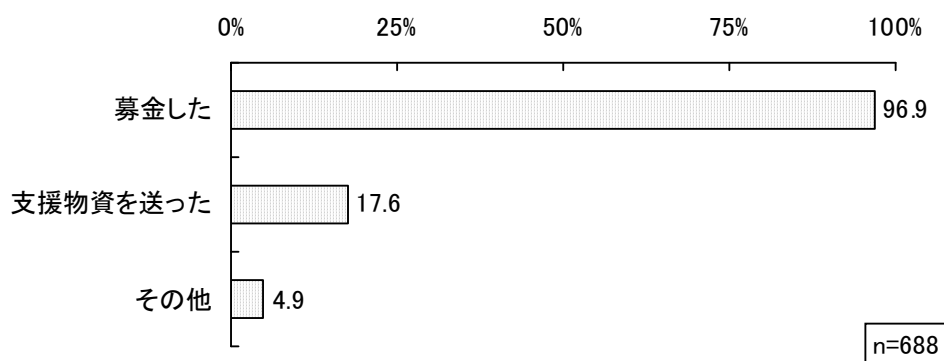
図20：今後大震災がきたら、不安に感じること ※複数の回答



④被災地支援

今回被災地への支援を行ったかについては、「募金した」が96.9%で最も多い。また「支援物資を送った」も17.6%となっている。「その他」では、被災地の親戚への直接支援のほか、町内会等を通じて支援物資を届けた」等の記述があった(図21)。

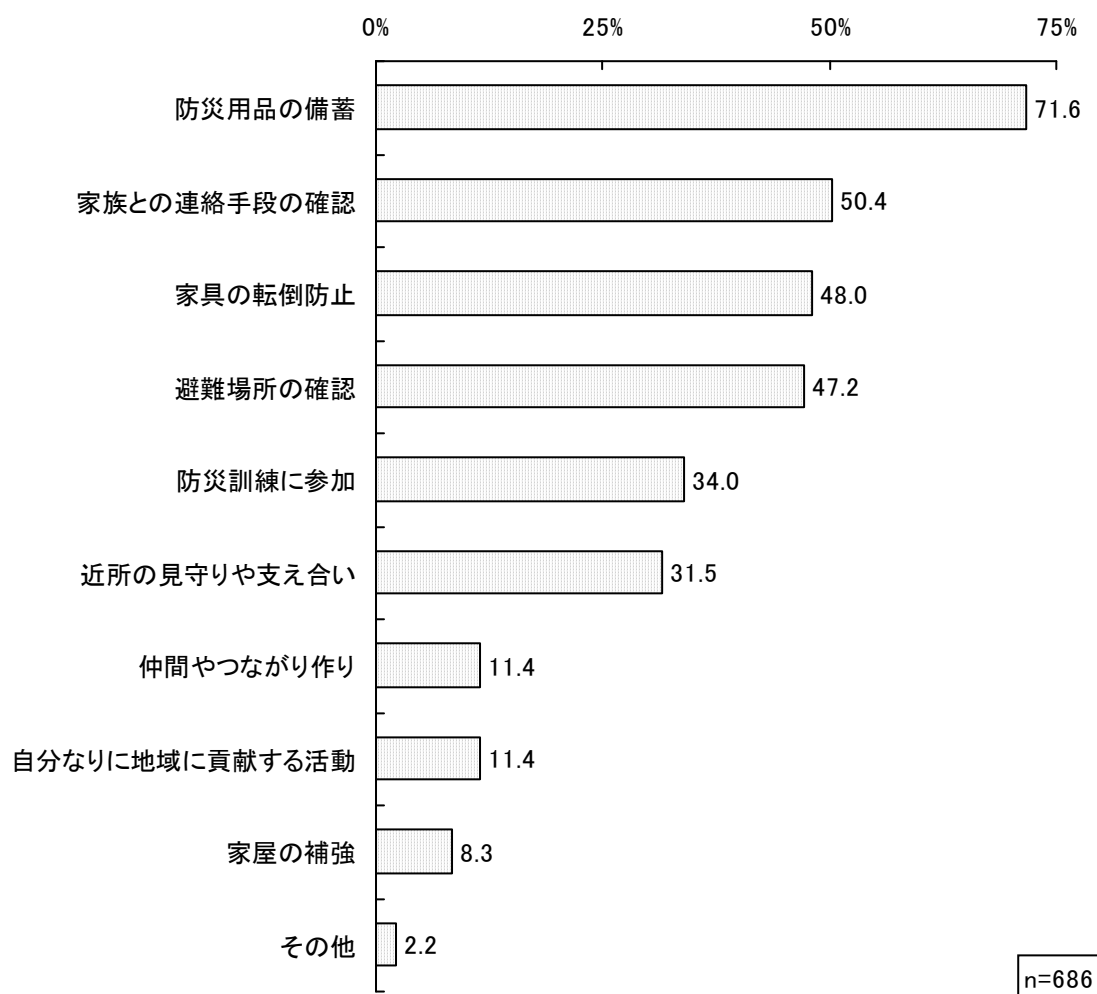
図21：今回、被災地への支援を行ったか ※複数の回答



⑤災害への備え

いま、災害に備えていることは、「防災用品の備蓄」が71.6%で最も多い。これに「家族との連絡手段の確認」(50.4%)、「家具の転倒防止」(48.0%)、「避難場所の確認」(47.2%)が5割前後で続いている。「防災訓練に参加する」は34.0%、「近所の見守りや支え合い」は31.5%とやや少なくなっている。(図22)。

図22：いま、災害に備えていること ※複数の回答

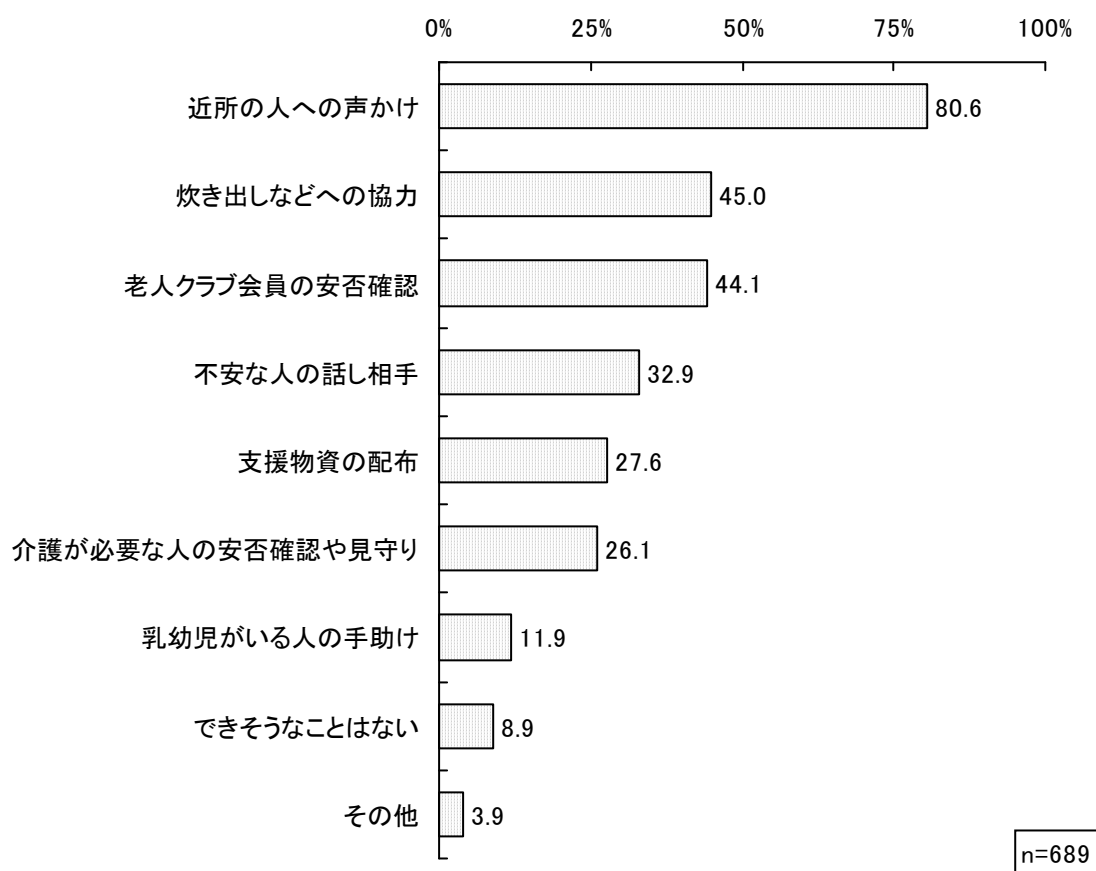


「自分なりに地域に貢献する活動」の主な内容としては、次のような記述がみられた。「近所のつながりを広げるため“みんなの居場所”を仲間と立ち上げた」「災害時要援護者の安否確認など」「友愛活動」「いざという時のために日常から地域の人との絆を深める」「民生委員として地域の見守りをしている」「ご近所の1人暮らしの老人の把握と声かけ」(複数)「地域の小学校での炊き出し訓練」「老人クラブに入会して活動している」「自治会活動に協力している」「ボランティア活動、老人会等の集いには出席するようにしている」「防災員として活動」等。

◎震災発生時にできそうなこと

震災発生時にできそうなことでは「近所の人への声かけ」が80.6%で最も多い。次いで「炊き出しなどへの協力」(45.0%)、「老人クラブ会員の安否確認」(44.1%)が続く。なお「できそうなことはない」が8.9%であり、9割以上が何らかの貢献ができると考えていることがわかる(図23)。

図23：震災発生時にできそうなこと ※複数の回答



(4) 自由回答のまとめ（主な内容）

■3.11 そのとき自分でしたこと

- ・ まず自分からと、1人暮らしの人に声をかけ、安全の確認をした。
- ・ 関東大震災(大正 12 年)の経験者である母親から表へ出てもダメだと言われていた。それで玄関の戸を開けて、表と内とどちらでもない所にたたずんだ。靴をはけ、という母の教えの通り、とっさの行動は金銭をお膳の上に残したまま靴をはいて、余震を待った。
- ・ 災害用品の備蓄・貴重品は整理しているが、今回すぐ持ち出しできる場所に置くようにした。いざというときは身の安全が第一。飲料水、薬だけは確保。靴を履く余裕がない場合に備え厚手の靴下を枕元に。枕元に 1 ヶ月位、水・薬・靴を置いて備えた。
- ・ 停電のため懐中電灯を各部屋に備え、電池を補充した。
- ・ まず3日間ぐらいの食糧、カンパン、水、電池、新聞等できるだけ必要品を準備した。
- ・ 避難場所の確認、災害時に家族とかわす緊急連絡の方法を確認した。

■当日困ったこと、心配だったこと

- ・ 勤務地に地下鉄しかないため、乗り物は全部ストップ。タクシーもなく何時間もタクシーが来ないため、寒い中、困りました。臨時バスでも出してもらえればと思った。
- ・ 携帯も通じず、コンビニは何もなく、困った。
- ・ 発生時は、日頃冷静に避難行動できると思っていたが、いざその時になるとパニックになってしまい、貴重品の一つも持ち出せなかった。
- ・ 夜9時過ぎまで停電で、電話もできず、ろうそくで電気がつくまで待っていた。コンビニが前にあって食料は買うことができたが、電池などはなかった。普段から非常用品を用意すること、家が壊れたら、生き埋めになったらと思うと近所は80代が多いし、どうなることか。今回の地震は昼間だったが、あれが夜だったらもっと怖かったと思う。
- ・ 市内の美術館にいたが、情報も与えられず帰るように言われた。ランドマークタワーに行き、バスが動いていると館内放送で知らされ、そごうのバス停で約6時間待って夜中の1時に帰宅。あとで、歩いた方が早く帰れたと後悔した。

■その後心配だったこと、不安なこと

- ・ しばらくの間余震が怖くて、夜もなかなか眠れず睡眠不足になった。テレビをみて津波の恐ろしさ、もしここ横浜に津波が来たらどうなるだろうかと仲間で話し合った。
- ・ 私の住んでいる町会は防災、災害に備えて何も行っていないように感じ、不安。
- ・ いっどこで地震にあうかもわからない。遠出、外出には不安を感じる。食料品の不足などパニックになった時の人々の行動に、歳とともについていけれないと思う。
- ・ 現在の状態だと自分だけでなく他の人の手助けもできそうだが、体調を壊したり、パニックになった時を想像すると、お世話を受ける側になるだろう。
- ・ 家の近くは細い道が多く、逃げられないと思う。早く家を出なければと。
- ・ 防災訓練等やっけていてもいざとなると自分の身を護るだけで、果たして落ち着いて行動

ができるか。今回の地震で特に地盤の緩い場所にいたせいか恐ろしかった。

- ・ 年齢も高いし足の悪い長男がいるので、そのことが心配。

■3.11 を経験して気づいたこと、心がけたいこと

- ・ 今回の地震のニュースを見て人は1人ではなかなか暮らしていけないと思った。不自由なことは声をあげて助けを求めるのが一番だ。
- ・ 家の中にある必要でない物を整理しておかないと、本当に必要な物が役に立たない。
- ・ 私たちはせめて風評被害に流されないしっかりした情報に耳をかたむけ、被災された人々を応援したい。
- ・ 一時避難集合場所に近隣の人たちが平坦な道でなければ行かれないと思うので、3日間の備蓄は常に点検しておくべきである。
- ・ 地震の揺れがおさまってから、屋外に出て近所の人と煙が出ていないか見て歩き、初期消火を心掛け、寝たきりの人のところにも行ってみる。私たちはできるだけ家の回りに気を配り、空巢等に注意するよう話し合っている。
- ・ 自助共助のこと、また心の準備も必要。老人が多くなり、1人暮らしが多い。自治会の助け合いをモットーにしているが、見守りふれあいをしながらひとつの心で助け合っていきたいと思う。
- ・ 人に迷惑をかけないようにと思う。自分がおかしくならないように。
- ・ 老人が多いので若い人がどれだけ手助けになるか？ 近所の方がどれだけ力になるか？ 自分自身の体力と判断が必要。
- ・ 予備知識を持ち、日頃考えておいても突然のできごとには思いもよらない結果が生まれる。ならば心の準備をどう持つべきか。
- ・ 災害時現場にいる人の結束が必要。いたずらに騒ぎ立てないよう、自制したい。
- ・ 私は阪神大震災の翌日からずっと震災後の地で過した経験がありますので、大切なのは正しい情報を得ることだと思っている。電話は当然×、電気も×になった時、ラジオが役に立つが、周辺の人たちはあまり持っていないと聞いた。電池式のラジオはぜひ必要。今回もFM横浜がとてもしゃべりなニュースを流していた。
- ・ 日本に住む限り、種々考え、心配しても仕方なく、現在運命論に逃れている。

■まちづくりや行政への提案

- ・ 町内会から、行動について確認は何もなかったのが残念です。連絡網を作り、しっかりとした町内を。
- ・ 町内会会員の名簿は個人情報の過剰な心配の余り、安否確認ができなくなるのでは。
- ・ 災害時に役割分担ができれば行動しやすい。婦人部で、老人部で、子供会、青年部のチームワークで役割分担を考えたらどうか。特に、神奈川県横浜市のお役所は早い行動で対処していただきたい。その他正確な情報、救急医療、ライフライン等々心配である。
- ・ 特に小学校の児童たちの登・下校時は一般道路において地震が発生した時、安否の確認、地域の人々の冷静な判断で児童たちを守ってほしい。

- ・ 地域の地質調査等を行って、きちんと報道してほしい。
- ・ 南区唐沢地区は私道が多く、道路がデコボコのうえにセットバックが守られていないので火災・塀・木の倒れなどが気になった。道路を整備してほしい。
- ・ 地震後、停電になり、11 時頃まで薄暗い懐中電灯の中で、家族が帰ってくるまで不安な気持ちだった。せめて、停電の状況、復旧予定等の情報がほしかった。
- ・ 東京在住の仕事仲間が上大岡の仕事場で地震にあい、交通手段の情報が得られず、宿泊場所を確保できずに、多くの人たちと公園で朝を迎えたとのこと。もう少し的確な情報や指示の必要性を感じた。
- ・ 私の家ではペットも多いので、このような地震や災害が起きた時のことを思うと心配。人間の避難する場所は何により大事だが、ペットの安全を守る場所も検討してほしい。
- ・ 避難所に行きましたが寒く、冷たい水と乾パンをいただいた。温かい飲み物があれば。
- ・ 地域の避難場所自体が安全かどうか。収容しきれないスペースがあるとは思えない。
- ・ 今回は私たちの所は停電もなく、また親類にも被害がなかったが、近所(地域)の方々も物品の買占めに右往左往している姿を見て残念に思った。情報の伝達を正確にすれば(自治会、老人会を通じて)少しは地域の方々も落ち着かれたのではと思った。
- ・ 「原発」地震の対応はできているのか？
- ・ 義援金の強制で、困っている人がいたので、募金の仕方も気をつけてほしい。
- ・ 被災者に支援物資やお金が届かない。早くにカンパや募金を集めて送ったのにどうなってしまうのか。現地の人の気持ちを思うとやりきれない。(複数)
- ・ 戦争中防空頭巾を被って近所の人たちと逃げたが、現代ではお年寄りにやさしい軽くて丈夫なヘルメットがあるとよい。

■その他

- ・ 地震は天災だが、地震による原発事故は人災だ。原発はすぐ廃止にして、太陽光や水力、地熱発電、備蓄エネルギーの活用を早急に始めるよう政治に望む。国の予算は軍事費でなく私たちの安全、安心の生活のために使ってほしい。
- ・ 横須賀の原子力潜水艦が爆発したら横浜も被爆してしまう。
- ・ 歳をとって大災害を受けると、恐らく立ち直すことはできそうもない。本当に人様にご迷惑をかけるだけ。今は、起きないことを祈るばかり。普通に暮らしていることは当たり前ではなく僥倖である。
- ・ 今は年金暮らし。私たちは長いこと物を大切にしてきたが、時代も若い人の教育もダメで、頭つかわず自分のことだけ。せまい日本。歩くことさえしない車社会、空気、ガソリン、物を使い捨て、日本の先がわからない。
- ・ 震災津波で何もかも失われた方々を思い、情報を耳にするたび胸が痛む。政府の方々、それぞれに携わる方々、復興への支援、争いのない国作りをしていただけますように。

(このほか、被災地の方々へむけた祈りの言葉が多数あったことを付記しておく。)

3 グループ・インタビュー「災害とシニア女性のチカラ」

■日時：2011年10月3日（月）10:00～正午

■場所：フォーラム南太田 会議室

■出席者：（南区老人クラブ連合会女性会員、敬称略）

石村恵子、大林茂子、金児和子、木下弥栄子、久保木敬子、小早川津恵乃、志賀笑子、田中暁美、西田富久子、細井可江、菅原充子（南区老人クラブ連合会事務局）

先のアンケートに回答いただいた女性会員のうち、60代3人、70代6人、80代2人、あわせて11人の女性から直接お話を聞く会をもった。主に、「3月の地震の時に感じたこと」、「災害時にあなたができそうなこと」、「地域で女性の力を生かすには」の3点についてお聞きした。



■3月11日、外出先で地震に

息子夫婦と桜木町のランドマークタワーの前にいました。揺れたとき、とっさにベンチに座ってしまいました。ホテル1階の大きなシャンデリアがすごい揺れで、立ち入り禁止に。バスが来なくて、桜木町駅へ行っても電車も地下鉄も動かなかった。だんだん寒くなってきて、情報もなくて、若い人たちが携帯で情報をとろうとしても全然通じなかったです。駅前の喫茶店に席はなく、仕方なく地下街の飲み屋さんが開いたのでそこへ。ホテルも部屋はあるがエレベーターも止まってお客さんを入れられないといわれ、4つほど回ってもだめでした。飲み屋さんもしきに満員に。携帯電話のウィーンウィーンという警報があちこちで鳴りだし、なんともいえない恐怖感を味わいました。

結局、夜8時になっても電車は動かなく

て、私たちは上大岡の自宅まで歩いて帰りました。鎌倉街道は人がいっぱい、軍隊アリの進軍みたいでしたよ。車道は渋滞で救急車も動かない。車のライトで明るかったです。お勤め帰りの方は歩く速度が速い。私たちは山登りをしていて健脚ですが、危険を感じて端っこを歩きました。が、端っこは街路樹があったり、段があったりして危ないとわかりました。

マンションの8階まで、停電のなかで階段を上りました。途中ほんとに真っ暗で、壁をさわりながら、つま先で探りながら、やっとわが家に…。2時間かかりました。



趣味の会で都内にいました。そのあたりは古い家が多いんです。ガタガタときたとき、歩道の向かい側が小学校で、誰かが「ここは危ないから反対側の道へ！」って。

古い家が倒れたら、私たち死んでいたかもしれない、やっぱり誰かの知恵が有効だなと思いました。

横浜へ帰るなら JR にと、墓地のあたりまで行くと、さっきまでほとんどいなかった人がそろそろといるんです。電車が止まって全員おろされ、墓地が一番堅固だからとのことでした。そのときはまだ、点検すれば今夜じゅうに電車は走らるだろうと樂觀していました。夕方になって寒くなり、駅まで行ったらシャッターが閉まって人は入れない。トイレも使えないし、駅前の喫茶店も満員で。交番で聞いたら、「公園にでも行ったらどうですか」と。向かいの消防署で聞いてみたら「いま避難所が開設されました」。それで近くの高校へお世話になりました。

駅前のコンビニで食料を買おうとしたら、もう一切売り切れていました。お店で中華そばを食べましたが、正解でした。温かいものを食べておなかがいっぱいになったら元気が出ましたよ。

避難所では高校の先生から毛布 1 枚と水と乾パンをいただいて、暖房のきいた教室へ。床には段ボールを敷いた上に毛布が敷いてあったけど、一睡もできなかったです。翌朝は 7 時に放送があって、温かい炊き込みご飯とお茶をいただきました。先生方は一睡もせずに番をして、朝ご飯も用意してくださいました。翌朝やっとのことで帰りましたが、携帯電話があんなに役に立たないとは。なにしろ公衆電話しかつながらなかったのが衝撃でした。

■ 3月11日、自宅で地震に

3.11 の震災で自宅が半壊になりました。3、4 丁目では瓦屋根が全部落ちた、天井

が落ちたというのが多くて、思わぬ災害にあったなあ。家は建て替える予定で、いまは近くのマンションに臨時に越しております。マンション暮らしは初めてで、戸惑いながら暮らしています。

地震のとき息子は仕事で、私ひとりでした。片手はこたつ、片手は椅子で、座って揺れがおさまるのを待っていました。大丈夫だったかなと思ったら、二間の間口の柱 3 本のうち、真ん中と右の柱が曲がり、アルミサッシの窓が 20 センチぐらい開いて、…頭の中では、あ、地震だ、逃げ道を、玄関の戸を開けなきゃいけないと思ったんですが、それは思っただけで、ぺたっと座ったきりからだが動きませんでした。揺れも 3 回目になったら、階段の上から物がばらばらと落ちてきて、玄関まで荷物でいっぱいになっちゃって、動けなくなった。

近所のレストランのご主人が「大丈夫か、おたくはひとりだから心配になって見に来た。無事でよかった」って。しばらくして息子から電話が入って、大丈夫かって。今晚は帰れないからっていうから、ハイって言ったけど、玄関の鍵は開いたけど、鍵がかけられない。それでも夜中に息子が帰ってきてくれました。ガスの火がつかないよって言ったら、ガスメーターの復帰ボタン押したかって言うから、その時初めて思い出して、は一、と思いました。

やっと外に出てみたら、最近高層マンションにはなりましたが、(新川町は) 下町でしたのに、人っ子ひとりいないんです。大きい地震なのになぜ人が出てこないんだろう？ あとで聞いたら、みんな怖くて、そのまま家で縮こまっていたとか。古いマンションの人は廊下に出たきり、へたりこんじゃって、動けなかったそうです。

今思うと、ふだんからの準備、防災グッ

ズなどが一切役に立たなかった。インスタントラーメンを戸棚の奥からひっぱり出したけど。頭のなかで災害が起こったらああしてこうしてと言われたり、みなさんに言ったりしてるのが、全然役に立たなかったっていうのが私の実感でした。やっぱり実際には、とっさの判断ができる人とできない人がある。自分が体験してみても難しいなと思いました。



ちょうどひとりで遅いお昼をしまして、これはちょっと大きくなって思いました。うちのほうは地盤が固いので震度3以上じゃないと感じないんですが。急いで片付けて、廊下から全部開けた。揺れが長いし、外へ出てみようかなとは思ったけど、まずうちの中を見回しても、倒れる物が全然ないので。私は関東大震災の年に生まれたので、地震の時はこうと母から教えられているもので、まあ大丈夫かなと思いましたが、立ってられない。結局、座ってしまっておさまるのを待っていました。

ガスも電気も止まらず、なにひとつ物が落ちないもので、地盤が固いのはありがたいです。すぐに、うちは落ち着いてますからってお経をあげて、その日はひとりで過ごしました。

■ 1人暮らしの方への声かけ

地震の時はとにかく1人暮らしの方が心配で。元気な方は表に出てこられたんですけど、1人暮らしの方はそう簡単に出てこられない。私が通りに出たら、民生委員の方が出てこられて、ふたりで、1人暮らしの方の家を回りました。いるはずなのにいくら呼んでも返事がない家があって、その窓から煙がモクモク出てきたんです。え！と



思っただけに回り、どうしたの！大丈夫？と声をかけました。電話を一生懸命かけているうちに台所のこと忘れちゃったらしくて、回ってみてよかったなと思いました。



96歳のおばあちゃんが、娘さん夫婦と住んでるんですけど、娘さんは帰れない。そのおばあちゃんは足も悪いし、娘さんたちが帰るまでずっと付き添って、食事をさせて、トイレも何回も。その話をどうにか携帯で知らせたら、やっと10時半頃娘さんも隣町から帰ってこられました。おばあちゃんも不安がっていましたので、昔の話を聞きだしながら、笑いをいれて、一生懸命付き添っておりました。



うちは高台で、電車が止まりっきりなのも見えるし、前はみなさんの通り道なので、電気をともして明るくしたり、当日は、10時半を過ぎてからですが、だいじょうぶですかーと、みなさんを励ましながら、そんな1日でございました。



近所に80代の方と、1人暮らしの方がいたので、まず訪問しました。大丈夫ですかと言ったら、みなさん元気で、大丈夫よって声を聞きました。

■やはり、隣近所の助け合いが大事

私は前に民生委員をやっていたので、1人暮らしの方がわかることと、60年間住んでいますから誰が高齢者かひとり暮らしかわかりますので、常に老人会で声かけをしています。



老人会に入っている方は元気だし、仲間意識があるし、いろいろ伝わるけど、入ってなくて、1人暮らしの方だと、みるのはやっぱり町内会かなと思う。ちょっとさみしいですね。



アナログ人間で、パソコンもできませんし、携帯電話もかけると受けるくらいしかできません。それで今まで何の支障もなかったんですが、今回のようなことがあると、子どもから電話が通じないと言われて、心配してバイクでとんできて、おばあちゃんどう？と言ってくれたんですが、結局遠くの友達とも連絡がつかない。ましてや自治会内、老人会内で連絡をとりあうことが困難になってしまうと思うんです。個人情報があるさくなくて、名簿もつくらない、つくれたない、名簿をつくっても私の家はいれなくてくださいみたいな感じで、昔みたいに連絡網をつくって、この人につなげれば、後は全部つながるというような組織がない。だから、お年寄りはどうも置いていかれてしまう。そこを少しは元気な者が気配り、目配りして、なるべくご近所さんくらいは顔と名前、もしものときの連絡先くらいは把握していかなきゃいけないんじゃないかと思っています。



もしもの時には子どもがここにいるから連絡してくださいと言ってくださる方もい

るかわりに、いや区役所とかご近所さんに迷惑をかけることは一切けっこうです、自分のことは自分でできますから、という頑かたくな方もいらっしゃる。そこをちょっと、いつもの時間より雨戸が開くのが遅いとか、なにかのときの気配りがご近所同士でできれば…。特に男の方の1人暮らしというのは、ほんとにやっかいと言っちゃ失礼だけど、ゴミを出しに出ているときに「おはようございます」って言っても、あまり返事をくたさらない方も…。そういうときは、雨戸のひとつ、新聞受けの新聞ひとつ、やっぱりご近所でいろいろと注意しあっていく意識が必要じゃないかと思う。



最近ご近所のつながりが希薄になっている気がいたします。あまりご挨拶もなさらない、お子さんは元気よく「行ってらっしゃい」と言ったりしますが、中間層は挨拶もしない。きずな絆ということがよく言われますが、戦争中、みなさんも経験あると思いますが、隣組、声をかけあったり、逃げるときも一緒に逃げようといったあの組織というか心構え、これはとても大事なことと思う。



老人会に入っている人だけが連絡をとるんじゃなく、学んだことは、自分の近所に知らせなきゃなと思います。回覧板回しても読まなかったり、どこかで止まったりということもあるので、やっぱりご近所さんの顔なじみ、あの人はどこの人だとわかるような状態にもっていきたいなと思って、ご近所を歩いております。



地震の時、私はスーパーへ行っていて、帰ってきたら、うちの周り、誰も出てない。みなさんどうしてるかなと思って、1人暮らしのおじいちゃん、おばあちゃんにはすぐ

声をかけたんですが、もう外に出る元気もないというような方もいらしたので、これから自治会内で相談しながら、よりよく暮らしていきたいと思います。



■物が手に入らなくなって

なにかあったときに、隣近所が大切だなんて今回思いました。それとこれまで目の前がコンビニなので、何かあればすぐ買いに行けばいいと思って、お水も用意してなかった。買いに行ったら電池もない、何もなくて。やっぱりふだんからお水とかは確保しておかなきゃいけないなと思いました。

地震の明るる日から毎日スーパーに行列がすごくて、見ていると、おじいさん、おばあさんが毎日ティッシュペーパーだとか何かをぶらさげて帰っていらっしゃる。被災地の人たちに送れるものが滞っちゃいけないと思うので、必要以上に買い占める必要はないんじゃないかなと思う。

戦後の物がなくなるときに育ったので、ないならないで使える知恵、これで代用できるというのはお年寄りもみなさん持っていると思う。まわりに流されて、スーパーに行列しているのを見ると、すごく悲しくなりました。

■震災を経験して、地域では

毎日のようにみなさんが声を掛けてくださる。みなさんが震災を経験したせいか、やさしくなったように思うんです。道で会っても挨拶するようになり、子どもさんが学校へ行くときは「行ってらっしゃい、気をつけて」と声を掛けあうようになった。なにか悪いことがあると、いいことも生まれるんじゃないかと感じています。

老人会と一緒に、1人暮らしの人は毎月、見回りをしています。先日の台風の後には、1人暮らしの方のお宅の掃き掃除を手伝いに行ったり、みなさんに声を掛けあうということは日常的にやっております。

私の町内は 800 という大きな所帯なので、まとめるのに苦労しているが、いろいろな行事をたくさんしています。子どもと一緒に炊き出し訓練。薪を割って、ご飯を炊いて、カレーをつくってと、家庭防災部さんと婦人部さんがみなさん総出で、おじいさんが薪を割ったり、大きなお釜で、若いお母さん方にこうやってやるんだと見せながら、カレーパーティーをやっています。いまは母の会で、子どもたちに朝「おはよう」って声かけをかけている。子どもと一緒に自治会にたくさん出てくださるのはいい。老人が多くなる反面、年々子どもの数は減っている。若いお母さんを誘うには、親子連れで、と思います。

水、乾パン、おかゆの缶詰など、備蓄はけっこうしている。800 所帯全員に配るほどの備蓄はできないが、いっとき避難所にちょっとお水がほしいという方に、いざというときは配れるよう備蓄倉庫をつくって

いる。食料ばかりじゃなくて、オムツも必要じゃないか、ミルクとか簡易トイレもこれから揃えなければと話をしています。



一番問題なのは動物ですね。表に放すのか、(避難所に)そういう場所をつくるにしても…いやな方もけっこういらっしゃるだろうし。

■女性の力で、こんなことができる

地域で女性の力を生かすといっても、昼間はおばあちゃんしかいない、そのときは女性がやらなきゃ。夜だったら男性もいますけど、昼だったらやっぱり女性ですよ、そこに力を入れて防災訓練をしています。1日の講習なんかも、参加して勉強したことが、すべて自分にかえてくるし、人の手助けにもなるのでみんなで参加しています。150人ぐらいで、ウォークラリーをやりまして、子どもが参加したらお父さんお母さんもついてくるので若い方たちにも伝えられます。障がい者の方に避難していただいて、それもみなさんに伝えられたらなあと思っています。

女性だから何もできないんじゃない、私たちもやるわよ、任せておいて、という気持ちで地域を支えていくことができるんじゃないかと思います。



いろんな情報をいただいて真似しようってこともあります。女の方たちってまとまりますよね。南区をこれからもよくしていきたいと思いますので、みなさんと一緒によろしくお願いします。



800所帯あっても、なかなか自治会も老人会も役員のなり手は出てこない。自己申



告で敬老の日の名簿をつくったときには、70歳以上が380人、所帯数にすると800のうち280軒ぐらいが70歳以上をかかえている所帯で、なかには1人暮らし、ご夫婦とも70歳以上という方もいらっしゃる。そういう方を孤独にしないように、なにか接点をもてるようなことを、これから自治会でも考えていかなければと思っている。



災害にあった方が一カ所に集められたときに、てきばきと合図する人が必要ですね。誰と誰がここに、食べ物の配給はこうするか。指導者が必ず必要になってくるので、町内会長さんや老人会長さんでも、上に立ってなにかやる方がてきばきとやれる、冷静に区分けできる、ご近所さんをうまく把握できる方というのを養成するという組織も必要だと思います。

Ⅱ 「シニア女性の防災力を生かした 地域づくり連携事業」 検討会

「シニア女性の防災力を生かした地域づくり連携事業」

検討会 委員名簿

■委 員

南区老人クラブ連合会 女性部長	木下 弥栄子
財団法人横浜市老人クラブ連合会 事業部主事	岡本 眞美
横浜災害ボランティアバスの会 代表理事	秦 好子
慶應義塾大学先導研究センター 共同研究員 慶應義塾大学 SFC 研究所 上席所員	園田 紫乃
南区家庭防災員 中村地区代表連絡員	高松 清美
社会福祉法人 横浜市南区社会福祉協議会 事務局長	門倉 義晴
株式会社神奈川新聞社 営業局長	篠原 慎一郎
株式会社テレビ神奈川 編成局長	岩田 悦子
横浜市消防局 予防課長	高坂 哲也
横浜市南区福祉保健センター 高齢・障害支援課長	荒木 和彦
横浜市市民局 男女共同参画推進課長	宮口 郁子
公益財団法人 横浜市男女共同参画推進協会理事	桜井 陽子

■事務局 男女共同参画センター横浜南(フォーラム南太田)

男女共同参画センター横浜南 館長	岩船 弘美
同 管理事業課長	細野 勝
同 担当職員	小園 弥生

「シニア女性の防災力を生かした地域づくり連携事業」検討会 第1回

■日時：2011年10月7日（金）14:30-16:30

■場所：フォーラム南太田 第2会議室

■出席者数：委員11名、事務局3名

■内容

1 ミニ講義 秦好子委員

2 各委員の活動紹介

3 報告 男女共同参画センター横浜南

(1)男女共同参画センター横浜南の施設と事業について

(2)「災害時におけるシニア女性の行動と意識に関する調査」について

1 秦好子委員のミニ講義

被災地支援活動経験、および災害・防災コンサルタントの立場から、お話を伺った。

■南区は災害リスクが高い地域



横浜市の「わいわい防災マップ」によると南区は迅速な避難行動が必要な地域となっている。その理由として「高齢者が多い」「人口密度が高い」「駅が7つあり、帰宅困難者が多数見込まれる」「高速道路のインターが3つあり、地震があれば封鎖されて降りてくる車が多い」「道路が狭く、震災時には使えない道路がある」「川が3つあって液状化の予測される地域がある」「住宅は古く倒壊危険度が高く、火災になると消えにくい」と公表されている。高齢者や1人暮らしの人は日常そのものがあまり安全でな

い中で生活している。けがをしたら身動きがとれずに飢え死にするようなリスクがある。直下型地震が起きたら、実際水が出るのか、下水道が完全にダウンしたらトイレが使えるのか、などの問題もある。

■災害時の課題と日ごろからの準備

日中仕事をしていて、防災訓練に参加できない層はどうすればよいか。ガスのマイコンメーターの復帰方法を知らず、震災後3日間煮炊きできなかった人がいると聞いている。帰宅困難者の受け入れ施設では、トイレが使えないときにはどうすればよいか、などの課題がある。

今回の東日本大震災でも年齢が高い人ほど多く犠牲になっている。避難行動が遅い人、動かない人を助けようとして津波の犠牲になった人もいる。南区ではとにかく「すぐ逃げる」ことが大切なので、少しの揺れでも、みんなで早く、散歩がてらでも公園に行くことをふだんからやっておく

とよい。日ごろの老人クラブや地域の見守り活動でお互いを見知っていて、「私が行かなきゃこの人たちに迷惑かける」と思ってもらうのが効果的。それから、地域では帰宅困難者に対し、水を出す、トイレを貸す、トイレの案内を出すなど、「支えながら支えられる」という意識をもつのが大事だ。

■被災地に見る、シニア女性の力

神奈川ボランティアバスの会は、県内のいろいろな団体が連携し、サッカー少年や高校生などを巻き込み、現地で必要なものをチョイスして、事前調査も入れて6回、20日ほど現地で支援活動をしている。できるだけ平常時に近いかたちで避難者の生活を支援している。

現地ではしだいに援助が見えにくいような援助が必要な時期に入っている。被災者間で被害状況の違いや境遇の格差からくる差別や中傷が問題になっている。一方で、ある学校の避難所では生活のルールを決め、6時半に中学生が起床を知らせ、ラジオ体操に誘う。給食当番があり、清掃は全員です。子どもたちの言うことをみんなが聴き、一所懸命やることで新しい人間関係が生まれている。復興や支援活動の中では、子どもから高齢者まで、多様な人が主体になれるしかけがあるとよい。みんな役に立ちたいと思っているので、仕事をつくり、機会をつくるとよい。

男性の権限が強い地域の中で、シニア女性たちは経験を生かし、避難所で起きる小さな困りごとを細かくケアしている。その力が避難所の運営を円滑にしている。ある地域の公民館の避難所では、婦人会を中心

に持ち寄りの食材で煮炊きをし、1人ひとりの健康状態にあわせて、減塩食、介護食を作っていた。顔が見えている地域だからこそその強みだといえる。

災害時の心構えは、自助、共助。つまり、まず自分、次に隣近所の助け合い、そしてみんなで、となる。道路が寸断され、消防車も救急車も来ない中で、地域で3日間、自分たちで何ができるかを考えて備えておくとうい。

阪神淡路大震災では、救出された人の2割が、その後亡くなった。たった一杯のあたたかいお湯が飲めれば助かる命がある。

2 各委員の活動紹介

■各団体等の取り組み事例

南区社協では、災害時救援ボランティアセンターの開設を想定し、ボランティア派遣のコーディネート仕組みを年内に策定する予定で進めている。



南区障害児者団体連絡会では、防災部会を設置し、防災訓練に参加したり、障害児者の避難所における生活上の困難について理解してもらうための啓発活動等を行っている。



各地区社協では、要援護者名簿の作成、「あんしんカード」の作成・配布、研修会実施など、それぞれ独自の災害時要援護者支援の取り組みを行っている。



住んでいる地域ではほとんどの女性が家庭防災員研修を修了し、家庭防災員に登録されている。日ごろから地域で見慣れな

い人を見ると、「どちらの家をお探しですか」と声をかけたりしている。



家庭防災員の自主活動として、まち歩き、図上訓練の講座を2回企画し、実施した。



震災後、1人暮らしのシニアが多いマンションの地域で、孤立の不安から新たな単位クラブ(老人クラブの地域班のような単位)が結成された。新しい単位クラブができるのは、最近ではめずらしい。



70歳以上の1人暮らしの方が20人住んでいる地区で、地震の後、老人クラブの友愛活動として1時間かけて見回りをした。日ごろは民生委員と組んで、月1回の見守り、ゴミ出しの手伝いなどを行っている。



横浜市消防局では冊子「減災行動のススメ」を作成し、配布している。これから新たに「防火・防災アドバイスブック」を4000部作成し、(社福)横浜市福祉サービス協会と組んで区ごとに研修会を開き、研修を受けたホームヘルパーが訪問先の高齢者宅で安全や防災に関する具体的なアドバイスをするしくみを作る。南区では11月に300人規模の会合で研修を実施する予定になっている。



南区役所は、災害時要援護者支援のため自治会町内会単位の名簿づくりを推進している。区内では震災発生後、単位町内会の活動事例として、地区内の安否確認を行った、市民にわかりにくかった計画停電の予定を印刷したものを配布して喜ばれたなどの話を聞いている。



市ではトイレパックを備蓄している。帰宅困難者対策としては、公共施設など指定の場所に毛布と簡易な食事などの備蓄を来年の春を目途に整備することになっている。街道沿いのディーラー(自動車販売店)などで自主的に帰宅困難者対策を立てているところもある。



神奈川新聞は、当初は被災地の新聞社と記事の提携をして、被災地の情報をできるだけ伝える取組をしてきた。7月の紙面改定で新たに防災担当を置き、毎週日曜に「減災新聞」を連載している。



横浜市の3館の男女共同参画センターでは、災害時にセンターが地域でどんな役割を果たすことができるかをテーマに調査研究に着手した。フォーラム南太田ではシニア女性へのアンケート調査、協会本部では被災地の男女共同参画センターへのヒアリング調査などを実施している。



ある地域の老人クラブでは、住宅用火災警報器を集団でつける活動をし、98%の普及率を達成した。「ありがとう」と言われることが次の行動につながっている。町内のおじいさんたちがドライバーをもって棚の転倒防止をしてまわった地域もあ

る。また、集合住宅で、「おたすけマン」という老人クラブの活動に若い人たちも参加している例もある。単位クラブで100円もらって草刈りをしたり、電球をとりかえるなどの活動をしているところもある。

▽

老人クラブの「友愛活動」に取り組むときに、“個人情報保護”がネックになる。隣近所のことは「聞いちゃいけない」と思われている。

3 意見交換

■安心・安全なまちづくりに向けて

今は地域のコミュニケーションを耕すチャンス。みんなが聞く耳をもっているし、いっしょにやろうという気持ちがある。

▽

日ごろから自分ができること、できないことをわかっていたいと思う。

▽

要援護者支援の仕組みが定期訪問事業とうまくつながり、地域の見守りとしてみ

んなに認識されるようになるとうい。既存の取り組みを洗い出し、情報交換をするとイメージがつかめるのではないか。隣近所の声かけや、班ごとに「いっとき避難場所」で助けてほしいことを、周りの人に伝えておく。1人暮らしの人なら「ドアが開かなかったら誰か助けに来て」と言うておく。

▽

余力のある人は、災害ボランティアとして支援にも加わるとよい。

▽

大規模団地で、防災訓練の参加率が低かったが、災害時に助かりたい人は防災訓練に出てください、と呼びかけたところ、参加者が増えたという。出てこない人には、「救急車を呼ぶ時に何とていばあなたのことが伝わるのか、それだけ書いてほしい」と呼びかけをしたそうだ。

▽

年配の人は、雑草と泥を重ねてコンロをつくる方法など知っている。そういうことを楽しんで、日常のなかで、話をしながら伝えていけるとよいのではないだろうか。

【第1回まとめ】シニア女性の力が発揮される地域づくりに向けて

- 防災への関心が高い今が、地域のコミュニケーションを耕すチャンスととらえる。
- 「仕事をつくる」「機会をつくる」。多様な人が主体になるしくみを作る。
- ふだんからの地域の声かけで、顔が見える関係づくりをすすめる。
- 既存の取組をつなげることで、「できること」をきめ細かく増やす。

「シニア女性の防災力を生かした地域づくり連携事業」検討会 第2回

■日時：2011年11月22日（火）14:30-16:30

■場所：フォーラム南太田 大会議室

■出席者数：委員 11名、事務局 3名

■内容

1 ミニ講義「コミュニティのちから」 園田紫乃委員

2 情報提供:

(1) 横浜市南区の要援護者支援の取組 南区福祉保健センターより

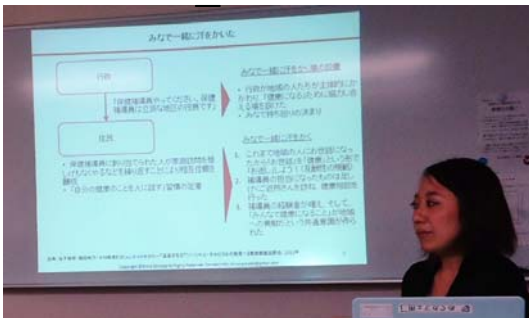
(2) 横浜市の災害対策における男女共同参画の視点 市民局男女共同参画推進課より

(3) 横浜市男女共同参画センターの役割 男女共同参画センター横浜南より

3 意見交換

1 園田紫乃委員のミニ講義

はじめに、調査結果を受けて、コミュニティ研究者の立場からお話を伺った。



■「コミュニティのちから」とは

今回の調査結果から見て、横浜市南区は相互信頼性が比較的高い、つまり人と人とのつながりがある地域といえる。3.11の震災時「だれかに助けられたことはとくになかった」という回答が多かった点では、その地域性をもっと機能させる余地があるとい

える。しかし、この調査を通じて、地域にはシニア女性の潜在力があることがわかった。

これを生かすには、「ソーシャルキャピタルが高い」つまり、交流がさかんで、相互信頼と互酬性の規範が確立しているコミュニティをめざすことが必要ではないか。

女性の力を生かして「いいコミュニティ」に生まれ変わった事例として、医療費が低いのに健康度が高いことで知られる長野県の保健補導員制度についてのコミュニティ研究結果がある。制度があるだけでは何も変わらないが、保健補導員となった人が地域の人たちに毎日毎日「最近体調はどう？」と声をかけ積極的にコミュニケーションをとることを続け、12年後には「風邪で寝込んだ」「転んで怪我をした」など補導員にだれかれとなく相談したり報告したりするようになって、地域の連帯感が醸成され、住民の健康管理に対する意識を大きく向上

させた。

これには、①行政のお墨付き②互酬性の規範③共通意識の醸成というプロセスがある。まず行政が制度をつくり、地区の中で持ち回り制というルールを決める。ここで行政のお墨付きによる信頼性が付与される。次に住民が、半ば義務的に割り当てられた役目だが、これまで地域でお世話になったのでお返ししようという気持ち、すなわち互酬性の規範によって活動を繰り返す。するとしだいに地域の相互信頼が築かれ、自分の健康のことを人に話す習慣が定着し、みんなで健康になることが地域への貢献だという意識がつけられる。

■ソーシャル・キャピタルを高めるには

いいコミュニティをつくるためには、①さまざまな役割（ロール）を用意して多くの人に出番を提供する、②役割が有効に機能するための決まり（ルール）と道具（ツール）を用意する。この2つによって、コミュニティづくりに貢献してもらうための「舞台」を整える。

このようにソーシャル・キャピタルとは、地域の人たちの日常的な活動によってさまざまな結びつきが形成され、相互信頼と自発的な協力関係が生まれやすくなるというコミュニティの共有資源をあらわす。ソーシャル・キャピタルが高いコミュニティにするには、みんなでいっしょに汗をかくしくみをどうやってつくるかにつくる。市民、地域組織、地域企業、自治体等が連携し「みんなに居場所と出番がある街」に、これが、内閣府が出した「新しい公共」のコンセプトでもある。

南区にはすでにいろいろな活動があり、コミュニティができていると思われるが、コーディネーター役が各関係機関と調整しながら場をつくっていくのがいいのではないか。コミュニティづくりでは目に見える成果が大事なので、例として「住民支えあいマップ」づくりなどはどうか。また、メディア関係者や行政は、その活動がどんなに地域に貢献しているかを繰り返し伝えて育てていくことも重要だ。

2 情報提供

(1) 横浜市南区の要援護者支援の取組

南区は災害時に被害を受けやすい地域だといわれている。人口は20万人弱、65歳以上が約45,000人、75歳以上が約20,000人で、超高齢社会になっている。

介護保険の認定を受けている人のうち要介護3以上の人、1人暮らしまたは高齢者のみの世帯の人、認知症のある人と障がい者合わせて、災害時に援護を擁する人が名簿で8,400人ぐらいいる。区では地域の人たちが主体となって日ごろから要援護者を見守り、助けるしくみを作ろうとしている。

具体的には、災害発生時に支援を必要とする人の情報をあらかじめ地域の防災組織が把握し、平常時から顔合わせや声かけを行い、発災時には地域で安否確認、避難支援を行うというもの。主体は自治会町内会で、そこに参画している民生委員や家庭防災員、老人クラブなどもろもろの人たちによるゆるやかな見守り活動を18区の中でも率先して進めている。

さきほどの話にあったように、南区は古

い町ということもあってコミュニティ意識が高いと感じている。

(2) 横浜市の災害対策における男女共同参画の視点

横浜市では、2008年に防災計画の見直しが行われ、人権尊重、男女共同参画の視点を入れた防災体制を確立することが明示された。過去の災害で、家事育児介護の負担が女性に集中したり、女性に対する犯罪が増加したりということも明記され、災害対策に男女共同参画の視点を取り入れたものになっている。

具体的には、企画立案に女性の視点を入れるため、横浜市の施策を決める審議会等に女性を入れること。そして、地域防災拠点の運営委員会にも女性を入れること。避難所の運営では、着替えや授乳ができるスペースや、周囲に気兼ねなく子どもたちを遊ばせられるスペース、女性が安心して使えるトイレを設置すること、防犯パトロールをすることなどが書かれている。また男女のニーズの違いに配慮した防災教育の実施、女性にむけた防災知識の普及、そして女性リーダーの育成などの項目がある。しかし、計画に書いたからすぐに社会が変わるわけではなく、なかなかそこまで進んでいないところもある。

今回の調査からわかるように、女性がただ単に支援される側ということだけではなく、担い手として大きく力を持っている、地域の鍵であるということを確認することが非常に大事だと思う。

(3) 横浜市男女共同参画センターの役割

横浜市の男女共同参画センターがこれまでに地域の課題解決にどのように取り組んできたかを参考までに紹介したい。

センターでは、男女共同参画の視点をもって相談や講座、あるいは調査や国内外の動向から、それまで見えにくかった地域課題をすくいあげ、それを社会の問題として捉え、行政や市民に対して発信する役割を果たしてきた。さらに市民の実践的な課題解決を支援するための講座や相談、情報提供などを行ってきた。

具体例として、パートナーからの暴力に苦しむ多くの女性たちがいるにもかかわらず、かつては「夫婦ゲンカ」として警察も対応しなかったDVへの取組や、「家事手伝い」として社会から見えない存在になっている若い女性のひきこもりやニートへの自立支援の取組などがある。

このような課題解決に取り組む上での強みとして、男女共同参画センターには①場(施設)がある、②市民と直接に接している、③ノウハウ、ネットワーク、人材を持っている、④行政へのフィードバック機能がある、などがあげられる。これらを生かして、シニア女性の防災力を生かした地域づくりについて、男女共同参画センターがどのような取組ができるのか、議論いただきたい。

3 意見交換

■地域防災拠点における女性の視点

横浜市では、「地域防災拠点運営要領」というマニュアルDVDをつくり、各区の

防災担当に配布している。その中に、女性の着替えスペースをつくることなどが盛り込まれている。

▽

消防局では地域防災計画の見直しをしている。避難所に授乳用、着替え用のテントを置く、仮設トイレをつくる場合は男性用と女性用とを離すなど、検討されている。

▽

阪神淡路大震災以降、避難所での犯罪が問題になった。東日本大震災の被災地では、避難所での見守り態勢がほぼできあがっている。国が被災自治体と支援自治体とのコーディネートを行い、派遣された保健所や社協の人材、看護師などによる 24 時間態勢が組まれた。



■シニア女性の力を生かすしくみを作るには

区社協のボランティアはシニア女性が主力だ。南区は防災に力を入れていて、209の単位町内会のうち8割が要援護者の名簿づくりに着手している。名簿ができたら次のステップをどうするかが課題。区役所も防災の取組をしているが、女性がどう参加できるか。例えば1つの地域で、区や区社協、男女共同参画センター、老人クラブなどが関わってまずモデルをつくる。それを

見てもらい、ほかの地区にも広げられるといい。

▽

研究者や大学を巻き込んでやっていくといい。学生は情報発信もしてくれる。

■防災訓練にも、シニア女性の力を

シニア女性は防災訓練に出たがらない。いつも弱者として扱われ、訓練で担架に乗せられてしまうが、実はもっといろいろなことができる。

▽

防災訓練はひな型が決まっていて、家庭ごとに、本当に必要な防災知識が得にくい。防災訓練の企画段階で、シニア女性に何が知りたいか、何ができるのか出してもらえば、自分たちのスタイルの防災ルール、行動計画ができるのでは。

▽

ひな型を変えるには試行錯誤が必要。小さなモデルから今までとは全然ちがうものを作る。適正規模はどのくらいか、より効果的に女性の力を生かすにはどうしたらよいか、少しずつ実証的につくっていくプロセスが大事だ。

▽

地域で高齢者に防災訓練参加の声かけをしたところ、手押し車を押しながら出てきた人、何もできないけれど参加したいという人など大勢集まり、水消火器を使ったりした。きっかけをどう工夫するかだと思う。

▽

「シニア女性」とひとくくりにしない。シニアの中にもいろんな人がいて、できることはたくさんある。すでにあるところに

「参加してください」ではなく、自分たちが作り、作ったもので身を守るという発想の転換が必要。

▽

防災訓練では救助する人・される人がいるパターンが多いが、これまでの災害を振り返ると、もっと違う防災力、日常の生活力が必要。明かりや水をどうするか。若い人は紙に火をつけて、小枝につけて、大きい火にしていく経験も少ない。防災力とはライフラインにたよらず、まず「3日間のげる生活力」をつけることからがスタート。

■シニア女性のリーダーシップを考える上での課題

会議に女性の委員に参加してもらい、計画の中で当事者として女性たちにできること、誰かの力を借りないとできないことを明確にすれば、シニア女性が主体的に関われるものになるのではないか。

▽

東日本大震災の被災地で、避難所の班長はたいてい男性。女性たちは決められたことをやり、役割が固定化している。そこに揺さぶりをかけないと、これだけ力のあるシニア女性が地域にいるのに、それを十分生かしきれないのはもったいない。もっと違う関わりの仕方をつくっていくことができないか。

▽

女性はトレーニングされていない部分がある。仕事を持ち続けた人とそうでない人、何かしら役所と一緒にやった経験のある人とない人で違いがあり、どちらかといえば

機会がなく高齢になっている人が多い。PTAの役員も2、3回断ってそれでも頼まれたらやるような、一步引いたところがある。

▽

横浜市老人クラブ連合会では会員は70代後半から80代が中心。約7割が女性会員なので、会長も女性が7割になってくれたらいいが、実際には2割弱。数値目標を立ててもなかなか。なぜかというところ、その世代は「責任のある仕事は男の方に」と。それで平成10年くらいに「女性会」を立ち上げたが、独自の活動をどうしていくのが課題。

■シニア女性のリーダーシップ = “ばあちゃんの底力”を引き出す取組とは

女性の側も最後は男性に任せてしまうところがあるが、活動を積み重ねていく中で、次の世代の人たちが自分たちもやればリーダーになれると思ってくれるといい。

▽

被災地の地元が管理する避難所では、一日中火を絶やさないよう番をしているのは、おばあさん。根気よく薪をくべたりひいたりしながら、中心になって、もめごとのないように座って場を守っているのは、“ばあちゃんの底力”。1人にひとつできることがあれば、10人集まれば10できる。地域活動はそれでいいのでは。

▽

防災訓練もすべてやるのではなく、水がなければどうするかなど小さいことを積み重ねていくだけでも違ってくるのでは。

▽

男性が1人もいないときに災害があったらどうするかを高年齢女性に考えてもらうのはどうか。若い人は薪で火を起こせない、計量カップがなかったらご飯も炊けない。「今こそ出番です」といえば、いきいきとやれる。老人クラブでも女性しか参加しない、という企画が出てくる。

▽

定年後の男性はご近所のつきあいはあまり上手でないようだ。退職男性に隣近所での戦力になってもらうか、活動できる人材を厚くしていくことも大事。

▽

地域の単位老人クラブでは、女性の会長も思ったよりは多くいるが、日頃どんなふうに活動しているのか。行政に言われてやる活動でなく、自分たちにはこんなことができるとなれば。そのお手伝いを男女共同参画センターができないか。今はやっていないが本当はこんなことができたというようなことがあるだろうか。

■地域の資源を知り、共有することも防災力

地域で月に何回か老人の方たちを集めてお話をしたり、リズム体操をやったり、血圧を測ってあげたり、相談されて病院を紹介したりといった活動をしている。

▽

あそこはブロック塀がある、ここが崩れやすい、などを知っているのも防災。生活感がないとわからない情報が地域にはある。

▽

水がどこにあるか、地盤が強いのはどこか、そこにどういう順番で集まるのかなど、

何か起きた時に具体的に知っておくべきことを共有するだけでも防災力になる。地域の資源が把握できて、現場で自分は何ができるのかをみんなで考え、地域単位でマニュアル化していく。それが、最初の防災活動ではないか。

▽

中村地区では、防災拠点を中心にまちを歩き、危険なところはどこかなどの情報を地図に落とし込んだ。地域にどんな資源があり、何が不足しているかもわかった。自分の地域を知ることは防災だけでなく、まちづくりにも必要だ。

▽

横浜市の「身近な地域元気づくりモデル事業」も、地域を愛して、そこに暮らしている人がふるさと意識をもって、防災、防犯と地域の楽しみを合わせて地図をつくっていくものだ。日常的に自分たちが地域の担い手になる、防災もそのなかにあると思う。南区で3つか4つの事例があり、戸塚区でも慶応大学が行っている。

■シニア女性のデジタルデバインド解消が鍵

シニアの場合、サイトをたどっていくスキルがないから、紙ベースにしなければならない。横浜市では「わいわい防災マップ」があって、住所を入れると、地震のときに自分の地域がどうなるのかわかる。が、自分で調べられる高齢者は少ない。携帯電話は使えるがメールはできない、そういう層の力をどう上げるか。

▽

「わいわい防災マップ」システムを使って地域で家庭防災員や自治会、町内会長を

対象に研修を行った。参加した 18 人中、パソコン経験者は 1 人しかいなかったが、地図づくりをし、ご近所にも配布した。コンビニが閉店したり、まちはどんどん変わるので、みんなで地図をリニューアルできるようにやり方を勉強した。

▽

テレビがデジタル化され、防災情報も D ボタンを押して、自分が住んでいる地域の郵便番号を入れると、最新の情報が見られる。相模原市では、そのボタンにしるしをつけておこうとチラシをつくって高齢者に配布した。そういうやり方もあるので、すべてパソコンというのではなく、わかりやすい情報をどう伝えるかが重要だ。

▽

IT 化によって情報が得られる層と、全くアクセスできない層とに社会が二極化している。どう情報を共有化していくか。サークル活動に出かけているが隣近所は知らない、という人も多い。が、3月11日の

あと、ふだん言葉を交わさない人とも話すようになった。向こう 3 軒両隣という人間関係の地層をどう掘っていくか。

▽

シニアだからパソコンができないと決めないで、一緒にやって、簡単にできればパソコンにも関心をもつ。指の訓練にもなるし、地図づくりだけを目的にするのではなく、広げていくことが重要だ。

▽

共有する過程で自分たちの言葉でマップを解釈するプロセスはとても大事。さらにそれを誰か 1 人が更新するのでなく、交代で順に毎月担当すれば、12 か月で 12 人ができるようになるのではないか。

【第2回まとめ】シニア女性の力が発揮される地域づくりに向けて

- シニア女性の地域での役割を見直し、女性が主体になれる出番やしくみを増やす。
- シニア女性の潜在力を生かし、リーダーシップを発揮できるような練習の機会をつくる。
- みんなが地域の資源を知り、情報を共有することが防災力を向上させる。
- シニア女性のデジタルデバインド解消は防災力向上の鍵となる。
- モデルとなる具体的な取組から始め、地域に広げていく。

Ⅲ まとめ

～シニア女性の防災力を生かした
地域づくりに向けて

1 シニア女性の潜在力とは

「シニア女性は防災訓練に出るのがいやなんです。担架に乗せられ、運ばれる役をさせられてしまうから。」横浜市老人クラブ連合会事務局でのこんなお話が、シニア女性の潜在力に着目した本調査を行うきっかけとなった。

また、内閣府がまとめた「平成 23 年度高齢社会白書」で紹介された、仙台市の NPO 法人あかねグループによる東日本大震災の被災直後の活動も、困難な状況の中、助けられるばかりでなく助ける側となってシニア層が力を発揮した事例として、調査のヒントになった。その活動とは次のようなものである。

「介護ヘルパーの派遣や高齢者への配食サービスを行っている宮城県仙台市の特定非営利活動法人“あかねグループ”は、調理場で配食用の弁当をつくり終えた頃、震災に見舞われた。建物は大きな被害は免れたが、電気が消え、電話も通じなくなった。しかし、ボランティアのスタッフは余震が続く中、暗い町を懐中電灯をたよりに歩き、お年寄りたちの安否を確認しながら弁当を配達して回った。家の中で震えているお年寄りもいたが、何とか全員の無事が確認できた。スタッフの多くは高齢で、身内が津波の被害を受けたり自宅が被災して避難所生活を余儀なくされた人もいたが、その後も避難所から事務所に通い配食や介護サービスを続けた。」(内閣府 平成 23 年版高齢社会白書 コラム 7「東日本大震災の被災地における高齢者の活躍」より)

横浜市内でも高齢化率が高く、高齢 1 人暮らし世帯も多い横浜市南区では、区の呼びかけによって自治会・町内会単位で要援護者名簿を作成する取組が進んでいる。一般的に高齢女性は災害弱者といわれ、非常時には保護されるべき対象となることはいうまでもない。しかし、高齢女性といっても、年齢は 60 代から 100 歳前後まで幅広く、援護が必要な方もいれば自立した暮らしを送っている方もいる。ひとくくりに無力な受け身の集団ととらえてしまえば、災害時に自分を守り、地域を守る力となるはずのシニア女性たちに出番が用意されず、長年の地域生活で培われた経験や知恵を生かすチャンスがないことになる。

災害対策の基本は自助・共助・公助というが、実際には行政機関は緊急対応に追われ、交通が麻痺し、情報が寸断される事態となった時、まずは地域の 1 人ひとりができることをして自分を守り、周囲の人と助け合わなければならないことは東日本大震災の経験からも明らかだ。それでは、その時シニア女性はどうのような力を発揮できるのか。それを明らかにすることを目的に、3 月 11 日の震災時、シニア女性たちがどのような行動をとり、何を感じたか、今後の災害に向けて何ができるのかなどについて尋ねるアンケート調査を行うことにした。

男女共同参画の視点をもって地域で普通に暮らすシニア女性を対象に行われた調査の先行事例は少なく、必要なサンプル数をどうやって得るかが最初の壁であった。しかし幸いなことに、南区老人クラブ連合会にご協力をいただき、約 900 通の回答を得た。ほとんどの地域の組織がそうであるように、南区老人クラブ連合会も会長以下、役員の大多数を男性が占めている。しかし、3 月の震災の記憶がまだ新しかったこともあってか、対象を女性

会員に限定した調査であるにもかかわらず、調査票の設計から配布までたいへん親身な助言、ご協力をいただいた。

2 3.11 そのときシニア女性たちは

2011年3月11日、横浜市で震度5弱の震災に遭遇したシニア女性たちが、実際に共助の力を発揮していたことが、調査の結果から把握できた。これまで経験したことのない大きな地震に見舞われ「こわくて動けなかった」という回答が27.2%あったいっぽうで、ドアや窓を開けた人が48.1%、テレビをつけた人31.6%など、とっさの行動で身の安全を確保したり情報把握に動いた人が多くあった。揺れが収まってからの行動では、「身内に電話をかけた」の58.5%に次いで、「近所の人に声をかけたり安否確認をした」との回答が34.8%あり、地域での自発的な助け合い行動があったことがわかった。また、震災時に一番頼りになる人はとの問いに対する回答は、「家族・身内」の84.1%に次いで「自分自身」57.3%、次いで「近所の人」40.2%となっており、家族や自分自身の次には、近所の助け合いに期待していることがわかる。回答者の9割以上が南区に20年以上居住していると答えていることから、おそらく老人クラブや町内会、ボランティアや趣味の活動などを通じて日ごろから顔の見えるつながりができていることが背景にあると考えられる。

ところが、震災時だれかに助けられたかという問いでは、「声をかけてもらった」が36.6%、「安否を確認してもらった」が32.8%となっているが、「助けられたことはとくになかった」という回答が46.1%と最も多い結果となった。また、今後の災害への備えについては、「防災用品の備蓄」が最も多く71.6%、次に「家族との連絡手段の確認」「家具の転倒防止」「避難場所の確認」と、自衛に関してはいずれも50%近い回答となっており、切実な危機感が表われている。それに比べ「防災訓練に参加」「近所の見守りや支えあい」など地域防災活動への参画については、いずれも30%台とやや低調である。シニア女性たちが、多くの人に期待されている近所の助け合いにいっそう力を発揮できるよう、シニア女性の地域防災活動への参画率を高めるための取組が必要だ。

シニア女性の潜在力は、次の項目からも見ることができる。震災発生時、できそうなことについての回答では「近所への声かけ」が80.6%で最多であった。次いで「炊き出しなどへの協力」「老人クラブ会員の安否確認」「不安な人の話し相手」と続き、全体では9割以上がなんらかの貢献ができると考えている。炊き出しなど体力が必要な活動は別としても、「近所への声かけ」「老人クラブ会員の安否確認」「不安な人の話し相手」など、年齢に関係なく役に立ちたいと考える人が多い。

そのほか、アンケートの自由記述や座談会の発言からは、子どものごろに関東大震災の体験を繰り返し聞いていたり、横浜大空襲で一面の焼け野原からの復興を目のあたりにしてきたシニア世代ならではの、落ち着いた姿勢が感じられた。いざという時、冷静さを失わない人の存在も地域の力のひとつとなる。また、東日本大震災のあと、地域の防災活動がより活発になり、自主的な見守り組織をつくったり、地域の行事に子どもたちも巻き込んで炊き出し訓練を行うなど、シニア女性たちが積極的に活動を担っている事例も報告さ

れた。

さらに、調査後に開催した「シニア女性の防災力を生かした地域づくり連携事業」の第1回検討会では、東北の被災地における困難な暮らしの中で、聞き上手、話し上手なシニア女性たちが、ばらばらになってしまった家族や地域の気持ちをつなぎ、コミュニティの再生に重要な役割を果たしていると報告された。また、第2回検討会では、地域で“お互いさま”の意識によって営まれる組織的な取組（互酬性の規範）が、地域全体の健康水準を向上させた事例から、地域を良い方向に変えていく大きな力として、ソーシャル・キャピタルの視点が紹介された。ソーシャル・キャピタルとは、地域の人びとによる日常的な活動によってさまざまな結びつきが形成され、相互信頼と自発的な協力関係が生まれやすくなるという、「コミュニティの共有資源」をいう。この視点は、本調査から見えたシニア女性の力を、可視化されていない、組織化もされていない地域資源であるけれども、地域をよりよくする可能性をもったものとして理解する助けとなった。

3 地域におけるシニア女性のリーダーシップの課題

以上のように、この調査ではひとくくりに災害弱者とされがちな、地域で普通に暮らすシニア女性たちが、災害時に力を発揮できる可能性が十分にあることを明らかにした。しかし、冒頭の防災訓練の話に象徴されるように、現状ではその力は実際の地域の取組の中で組織化されておらず、出番が用意されていないところに課題がある。シニア女性自身もその力を十分に意識してはいないと思われる。その背景に、地域社会におけるジェンダー格差の問題があると考えられる。

シニア世代は旧来の性別役割の規範の中で長年過ごしてきた世代であり、家庭生活だけでなく地域活動の中でも女性たちはお茶くみや炊き出しなどのケア役割を期待され、自らお手伝い役を担ってきた。その慣習は今も根強く引き継がれている。

調査によれば、横浜市における自治会や町内会等への参加状況は、男性が32.8%、女性が41.0%であるのに対し、単位自治会町内会長の女性比率は11.1%、地区連合町内会長では2.5%、区連合町内会長は0%と、実際に活動している女性の数に比べて役職に就いている女性の数は圧倒的に少なく、性別役割が固定化され意思決定に参画する女性が少ない、すなわち男女共同参画の進んでいない領域であることがわかる（平成21年度 横浜市「男女共同参画に関する市民意識調査」）。また、横浜市老人クラブ連合会の女性会員の割合は全体の6割を超えるが、会長は男性が8割を占め、やはり男女の格差が顕著である（平成22年度 横浜市老人クラブ連合会「横浜市の老人クラブ活動に関する会員アンケート」）。

このように、地域活動や老人クラブの活動に多くの女性が参加しているにもかかわらず、意思決定の場への女性の参画が進んでいないために、せっかくの女性たちの力が地域の課題解決に十分に生かされない社会構造がある。

東日本大震災後、内閣府は各都道府県あてに「東日本大震災への女性のニーズに配慮した支援について」という通知を出している。そこには、避難所の中でプライバシーを確保できる仕切りを設置することなど具体的な女性への配慮が盛り込まれていたが、当協会が

被災地等の主な男女共同参画センターを対象に行ったインタビュー調査では、避難所の多くは男性リーダーによって運営されており、必ずしも通知された内容が実行に結びつかなかったと報告されている（2012年2月 横浜市市民局男女共同参画推進課・公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会「災害時における男女共同参画センターの役割調査報告書」）。復興の過程においても、男性はがれきの処理に従事すれば賃金が支払われるのに対し、女性たちが避難所で何百人分もの調理を担っても賃金は支払われないというように、固定的性別役割分業が改めてあらわになったともいう。災害対応に女性の視点を反映させるためには、地域の小さな組織から政策決定機関まで、さまざまな段階の意思決定の場への、日ごろからの女性の参画が欠かせない。「日ごろできていないことは非常時にもできない」というのが、被災地からの教訓である。

4 シニア女性の潜在力を生かすには

それでは、地域の中でより多くのシニア女性たちがリーダー役を担い、シニア女性の力が主体的に発揮されるようなしくみを作るにはどうしたらよいか。また、地域の男女共同参画センターは、そのためにどのようなことができるのだろうか。

この課題については、シニア女性のエンパワメント、すなわちシニア女性がより自発的に、自信をもって意思決定の場に参画できるような働きかけと、シニア女性が参画できるように地域単位で構成されている組織のあり方から変えていくこと、このふたつの側面からの取組が必要ではないかと考える。

ひとつめのシニア女性のエンパワメントへの取組は、一步下がって男性を立てるようなジェンダー規範を内面化しているシニア女性たちが、自身の力を自覚し、自信をもって発言できるようになるためのものである。

これまで、シニア女性は同年代の男性に比べてリーダー役割を期待されることが圧倒的に少なく、リーダーとなるための訓練もほとんど受けていないことが多い。横浜市老人クラブ連合会の事務局の話では、過半数を占める女性会員のより主体的な活動を引き出そうと女性部を設けたが、行事のお手伝いやお茶くみが女性部の仕事になってしまい、特に男性といっしょの活動ではリーダー役を振り向けても「そういうことは男性にやっていただくほうが・・・」と尻ごみされてしまうこともあるという。

しかし、災害への危機感が高まっている今、被災地の経験を学んだり、組織の中で率直に自分の意見を伝えるコミュニケーション・スキルを身につけるトレーニングなどを行えば、シニア女性たちの活動への参画を進めることができるのではないか。その結果、例えば地域の防災訓練のマニュアル作りにシニア女性が参画し、同世代の女性が参加したくなるような内容が盛り込まれれば、訓練の参加率を上げることにもつながるだろう。また、情報手段としてのITスキルのトレーニングは、災害時の実践力になることに加え、精神的なエンパワメント効果も期待できることは、男女共同参画センターが長年行ってきた女性のためのパソコン講座の受講者アンケートの結果からも明らかだ。

そこで、シニア女性を対象とする男女共同参画センター事業として、男女共同参画の視

点による「災害と女性」講座や、率直に自分の考えを伝えるためのコミュニケーション法「アサーティブネス」、ITリテラシーを向上させる「女性のためのパソコン講座」などのノウハウを生かしたプログラムが考えられる。

ふたつめは、コミュニティの中でシニア女性たちの力が発揮できる環境づくりへの取組である。これまで男性リーダーを中心に運営されてきた、例えば地域の老人クラブのような小さな組織で、女性の参画を進めることのメリットを男性会員とも共有し、どうしたら女性たちがリーダーシップを発揮できるようになるかをいっしょに考える場をつくる必要がある。それには、これまでの地域の女性リーダー養成講座とは異なる、小さな組織ぐるみで女性も男性もいっしょに参加できるようなワークショップ・プログラムが有効ではないか。以上の観点から、男女共同参画センターの新たな事業を試し、それをモデルケースとして他の地域にも広げていきたい。

また、横浜市には家庭防災員という、市独自の自主防災組織の制度がある。自治会・町内会長からの推薦で市長の委嘱を受け、一年間の研修を修了すると家庭防災員として登録されるしくみである。任期はないので、登録者は累積していく。家庭防災員の研修は実践的な内容が中心で、登録者は一般市民に比べて備蓄をしている人が多いなど、安全や防災への意識が高く、近所とのつながりも強まっていると報告されている。このしくみはまさにソーシャル・キャピタルの視点から地域の防災力を高めようというものである。

参考までに、平成22年度までに家庭防災員として登録されている人の累計は、横浜市全体では約19万4千人、南区では約1万2千人となっている。登録者の過半数は女性で、いわゆるシニア世代の女性が多い。今回のグループ・インタビューでも、ある地域ではほとんどの人が家庭防災員だと語られている。すでに男女共同参画センター横浜北が「わたしの防災カノート」を用いたワークショップの出前を、いくつかの地域で家庭防災員研修として行っているが、今回の調査結果を受け、制度の運営主体である消防局所管課との連携を強化し、地域における女性のリーダーシップを支援する視点をもって研修に協力することで、シニア女性がより主体的に力を発揮できる可能性が高まるものと期待する。

5 おわりに

東日本大震災を経験し、首都圏では近く高い確率で大地震が発生するといわれる中、横浜市では防災計画の見直しが進められている。地域においても、東日本大震災の共通体験を経て危機感が共有され、防災への関心が高まっている今が、地域のコミュニケーションをよりよくする機会であるともいえる。

国際比較で見ても日本は先進国の中で特にジェンダー格差が大きく、地域におけるジェンダー格差の解消はたやすいものではないと思われる。しかし、本調査を手がかりに地域の諸機関との連携をはかりながら、男女共同参画センターとしての新たな事業の開発、実施につなげたい。

2012年3月

「災害時における シニア女性の 行動と意識に関する調査」について

このアンケート調査は、だれもが安心して暮らせる地域づくりに生かすことを目的に行います。

本年3月に発生した震災を経験された65歳以上の南区在住女性約1000人に、災害時およびそれ以降の行動と意識についてうかがいます。本調査を通して、女性の視点で見た地域の課題とともに、シニア女性のもつご経験やお知恵、災害時に発揮される力などを明らかにしたいと考えます。

なお、調査票の配布については、南区老人クラブ連合会様のご協力をいただいています。お手数とは存じますが、どうぞよろしく願いいたします。

- ☆老人クラブの女性会員ご本人様が回答してください。
- ☆あなたのお名前やご住所を書いていただく必要はありません。
- ☆アンケートの結果はすべてコンピュータ処理を行い、集計・分析を致します。
- ☆個人情報外部にもれることは一切ありません。
- ☆ご返送いただいた調査用紙は、終了後に当協会が責任をもって処分いたします。

★調査用紙の返送について

ご記入いただいた調査用紙は、同封の返信用封筒（切手不要）にて

9月15日までに ポストに投かんしてください。

★本調査の結果について

本年10月16日(日)のフォーラム南太田まつりで報告するほか、ホームページ、またご協力団体様を通して報告させていただきます。

【調査主体】公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会(指定管理者)
フォーラム南太田(男女共同参画センター横浜南)
〒232-0006 横浜市南区南太田 1-7-20
電話 045-714-5911
館長・岩船弘美 担当・小園(こそ)弥生

災害時における シニア女性の行動と意識に関する調査

以下の質問はすべて、あなた様ご本人についておうかがいするものです。
あてはまる項目に○をつけてください。また（ ）内にご記入ください。

1 ご自身やお住まいの状況について

問1 2011年7月1日現在、あなたは何歳ですか。(ひとつだけ○をつけてください)

<input type="checkbox"/>	①65歳～69歳
<input type="checkbox"/>	②70歳～74歳
<input type="checkbox"/>	③75歳～79歳
<input type="checkbox"/>	④80歳～84歳
<input type="checkbox"/>	⑤85歳～89歳
<input type="checkbox"/>	⑥90歳以上

問2 お住まいの世帯の人数は何人ですか。 () 人

問3 同居されている方はどなたですか。(いくつでも○をつけてください)

<input type="checkbox"/>	①なし
<input type="checkbox"/>	②夫
<input type="checkbox"/>	③子どもや親、きょうだいなどの親族
<input type="checkbox"/>	④親族以外の人

問4 あなたの家ではペットを飼っていますか。(ひとつだけ○)

<input type="checkbox"/>	①いない
<input type="checkbox"/>	②いる(具体的に)

問5 お住まいの住宅はどれにあたりますか。(ひとつだけ○)

<input type="checkbox"/>	①持ち家-戸建て
<input type="checkbox"/>	②持ち家-集合住宅
<input type="checkbox"/>	③借家-戸建て
<input type="checkbox"/>	④借家-集合住宅
<input type="checkbox"/>	⑤その他(具体的に)

問6 あなたは南区に住んで何年になりますか。(ひとつだけ○)

<input type="checkbox"/>	①3年未満
<input type="checkbox"/>	②3年～10年未満
<input type="checkbox"/>	③10年～20年未満

④20年以上

問7 日ごろ困ったときにあなたが相談する人はどなたですか。(いくつでも○)

①家族・身内
②老人クラブ役員・友愛活動員
③自治会・町内会の役員
④地域活動の仲間
⑤近所の人
⑥しごと仲間
⑦趣味の仲間
⑧民生委員
⑨とくにいない
⑩その他(具体的に)

2 3月11日の震災時の状況について

問8 横浜でも震度5強の大きな揺れがありました。そのとき、あなたはどこにいましたか。(ひとつだけ○)

①自宅にいた
②しごと先にいた
③外出先の屋内にいた
④外出先の屋外にいた
⑤乗り物の中にいた
⑥その他(具体的に)

⇒出かけていた方は 問8-1 へ

問8-1 あなたは、その日のうちに、家まで帰れましたか。(ひとつだけ○)

①帰れた(時間 分 かかった)
②帰れなかった(で過ごした)

問9 ぐらっと揺れたとき、あなたはどんな行動をとりましたか。(いくつでも○)

①こわくて動けなくなった
②テーブル等の下にもぐった
③ドアや窓をあけた
④テレビをつけた
⑤火を消した
⑥家や建物の外に出た
⑦子どもや介護が必要な家族、ペットなどを見守った
⑧倒れないように家具等をおさえた
⑨その他(具体的に)

問 10 あなたは地震による被害を受けましたか。(いくつでも○)

①家中のものが落ちた
②家具が倒れた
③家屋(の一部)がこわれた
④けがをした
⑤体調が悪化した
⑥気持ちが混乱して落ちこんだ
⑦その他(具体的に)

問11 揺れがおさまってから、あなたはどんな行動をとりましたか。(いくつでも○)

①落ちたり倒れたりした物をかたづけた
②身内に電話をかけた ○をつけてください→(固定電話で 携帯電話で)
③だれかに助けを求めた
④通帳や印鑑などをまとめた
⑤近所の人に声をかけたり安否確認をした
⑥人の手助けになることをした (具体的に)
⑦その他(具体的に)

問12 揺れた直後、震源地や震度など地震についての確かな情報は得られましたか。
(ひとつだけ○)

①得られた(なにから)
②得られなかった
③どちらともいえない

問 13 今回、このような地震が起きたとき、あなたにとって一番、頼りになる人は
どなたでしたか。(いくつでも○)

①自分自身
②家族・身内
③老人クラブ役員・友愛活動員
④自治会・町内会の役員
⑤地域活動の仲間
⑥近所の人
⑦しごと仲間
⑧趣味の仲間
⑨民生委員
⑩とくにいない
⑪その他(具体的に)

問14 その日、あなたはだれかに助けられましたか。(いくつでも○)

※ただし、個人のお名前は書く必要がありません。

例：「となりの人に」「老人クラブの人に」など

①声をかけてもらった(だれに)
②安否を確認してもらった(だれに)
③情報を教えてもらった(だれに)
④食べものや必需品を分けてもらった(だれに)
⑤安全な場所に連れて行ってもらった(だれに)
⑥助けられたことはとくになかった
⑦その他(具体的に)

3 その後について

問15 震災後約1ヶ月間に、あなたは停電や交通など生活に影響する情報を得られましたか。(ひとつだけ○)

①得られた(なにから)
②得られなかった
③どちらともいえない

問16 震災後約1ヶ月間にあなたが困ったことはなんですか。(いくつでも○)

①余震の恐怖
②食料品・必需品等の品不足
③交通機関の乱れ
④停電
⑤医者・薬の不安
⑥家族の介護
⑦話し相手や相談相手がいないこと
⑧原発事故と食物汚染が心配なこと
⑨その他(具体的に)

問17 今後、大きな地震が起きたとして、あなたがいちばん不安に感じることはなんですか。(いくつでも○)

①家が倒壊すること
②火災が起きるかもしれないこと
③いのちの危険
④身内の安否確認ができないかもしれないこと
⑤情報の不足
⑥血圧が上がったり、持病や体調が悪化すること
⑦不安なことはとくにない
⑧その他(具体的に)

問 18 あなたは今回、被災地への支援をなにか行いましたか。(いくつでも○)

①募金した
②支援物資を送った
③その他(具体的に)

問 19 今、あなたが災害に備えて行っていることはなんですか。(いくつでも○)

①家具の転倒防止
②家屋の補強
③防災用品の備蓄
④防災訓練に参加
⑤家族との連絡手段の確認
⑥避難場所の確認
⑦仲間やつながり作り
⑧近所の見守りや支え合い
⑨自分なりに地域に貢献する活動 (具体的に)
⑩その他(具体的に)

問 20 もし横浜で震災が発生したとして、地域の一員としてあなたができそうなことはなんですか。(いくつでも○)

①老人クラブ会員の安否確認
②介護が必要な人の安否確認や見守り
③乳幼児がいる人の手助け
④近所の人への声かけ
⑤炊き出しなどへの協力
⑥支援物資の配布
⑦不安な人の話し相手
⑧できそうなことはない
⑨その他(具体的に)

★今回の地震に際して、なにか感じたこと、考えたことがあれば、自由にお書きください。(とくになければ、書かなくても:けっこうです)

ご協力ありがとうございました。

★グループ・インタビューについて

今後、さらに何人かの方にお集まりいただき、お話をうかがうことを考えています。
そのことに協力してもよいと思われる方は、次の連絡先をお書き下さい。

(多数の方にご協力いただける場合、お住まいの地域などで調整させていただくことがあります)

ふりがな お名前	(グループ・インタビューに協力いただける方のみ、お書きください。)
電話番号	
ご住所	〒

内閣府 平成 23 年度 地域における男女共同参画連携支援事業
「シニア女性の防災力を生かした地域づくり連携事業」

災害時におけるシニア女性の行動と意識に関する調査報告書

発行年月：2012 年 3 月

発行者：男女共同参画センター横浜南（フォーラム南太田）

【指定管理者：公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会】

ホームページ <http://www.city.yokohama.jp/>

〒232-0006 横浜市南区南太田 1-7-20

電話 045-714-5911 ファクス 045-714-5912